



本多日生現下施本用著書一覽

○法華經自我講義 拾部 特價 金貳拾錢 (送料共)

○法華經要文 (賣切れ) 上製金壹圓 金貳圓 金參圓 金肆圓 金伍圓 金陸圓 金柒圓 金捌圓 金玖圓 金拾圓 (送料共)

○教育勸語と思想問題 拾部 特價 金壹圓 金貳圓 金參圓 金肆圓 金伍圓 金陸圓 金柒圓 金捌圓 金玖圓 金拾圓 (送料共)

○うゐの奥山今日こえて 拾部 特價 金壹圓 金貳圓 金參圓 金肆圓 金伍圓 金陸圓 金柒圓 金捌圓 金玖圓 金拾圓 (送料共)

佐藤海軍中將著  
○此の際に於る吾人の覺悟 拾部 特價 金壹圓 金貳圓 金參圓 金肆圓 金伍圓 金陸圓 金柒圓 金捌圓 金玖圓 金拾圓 (送料共)

右講讀希望者は左記へ申込んで下さい  
名古屋市東區田代町城山

統一編輯局

電話東五八八七番  
電話名古屋一〇八一九番

統一定價

一冊	金貳拾錢	送料五圓
半冊	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ月	金貳圓貳拾錢	送料共

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾錢	前
一頁	金拾五圓	前
半頁	金九圓	前
四分一頁	金五圓	前

書畫揮毫紹介廣告

肖像畫 絹本參尺幅貳位半身圖、料金五圓以上拾圓、但當分少々割引いたします  
佛畫 教主並に宗祖の尊影等、絹本四尺副尺五位料金參圓以上、但し或部分は特に注意をなし古名家の筆を臨摹し以て謹寫す  
畫の部 白唐紙襖張四本、料金壹圓以上四圓○掛軸用畫仙紙聯落壹枚、料金五拾錢以上  
郵券拾五錢にて淡彩小品畫を呈します但し御注文の方には此郵券を返戻し別に色紙形羽二重に揮毫した下さいませ○御注文は前金御紹介は返信料御添へ勉強せるかをおためし下さい懇請いたします 謹白

みやこ呉服店內紹介部

大正十四年一月十七日印刷納本(第三百五十九號)  
大正十四年二月一日發行

不許複製

編輯所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地  
發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
印刷所 名古屋市中區東區田代町字城山七十七番地  
編輯 國友 斌  
發行 鈴木 日雄  
印刷 三益 社  
名古屋市中區田代町字城山七十七番地  
電話東京五一〇七一番  
電話名古屋一〇八一九番

次 目

我が教徒の特色を發揮せよ……………本多 日生

マイル・ストオン……………古 田 昂 生

日蓮主義より見たる無量義經……………井 村 日 成 生

法華經要文講義……………本 多 日 生

童話「牛」……………中 村 日 生

罷唾錄……………山 根 日 東

記事報導……………東

第廿九年三月號

大僧正本多日生撰

# 法華經要文

布装 一部 金五拾錢 送料金貳錢  
紙装 一部 金參拾五錢

改訂再版發行、全文四號活字、總振假名付。

大僧正本多日生師著

# 法華經自我偈講義

一部 金貳拾錢 郵税金貳錢  
拾部特價金壹圓 (送料共)

第四十二版印刷發行

名古屋市中區田代町城山

發行所 統一編輯局

電話名古屋一〇八一九番  
電報東五四八七番

來ル四月十一日ヨリ十三日ニ至ル  
三日間修行

# 大法會

- 一、國禱會法要
- 一、祠堂施主祖先靈法要
- 一、財團翼替員祖先靈法要
- 一、關東地方大震火災映死之精靈  
追善法要

每日  
午前九時 法要  
午後七時 說教 管長本多大僧正  
午後三時 外全國布教師  
十一月十二日 午後七時 講演 數十名

右相營候條繰合御參詣被下度此段  
御案内申上候也

追而準備の都合も有之候に付御參詣の人員數  
四月五日迄に御通知被下度候

京都寺町二條下ル

總本山 妙滿寺  
法要部

電話(本局)八十六番  
接替口座大阪四六二五九番

# 我が教徒の特色を發揮せよ

本多日生

本日は軍人の方々を御招待を申上げて「楞嚴丸」の映畫をお目に懸けたのであります。楞嚴丸の事は我が日蓮主義と南朝の史實、即ち我が高僧の帝都を擁護したところの正義の觀念と結んで、或る大いなる働きをしたことを示したところの映畫であります。我國の歴史に於ては南北朝の紛議といふことは最も恐ろしいことであつたのであります。水戸の光園郷が「大日本史」を作られたのも其れが爲であります。

およそ物事は似て非なるものが最も恐ろしいのであります。今日の思想の問題に於ても、似て面して非なるものを十分に吟味、警戒しなければならぬのである。誰が見ても間違ひなく悪いとわかるやう

な事柄は、放任して置いても大した心配はないのである、それがサウでなくして、距離が不透明であればウツカリ善い事だと思ふて其の方に興して行く、その事が遂に非常な間違ひであつたといふやうなことが起るのである。私は今の日本に取つてはいろいろ重大な事があるけれども、この思想の嚴密なる批判ほど大いなるものはないと考へるのである。善さうに見えてその結果が悪くなる事が、今日の場合に澤山そこらに動いて居ると思ふのである。

これを吟味し警戒して行くにはいろ／＼の問題があります、けれども、それに就て吾々日蓮教徒としてはどういふ事を注意すべきかと考へまするに、別段に新しい注意は要らないと考へるのであります。

即ち日蓮聖人より教へられたるところの吾々教徒の特色を、彌が上にも洗練し發揮して參れば、この時代に對應するに於て適ちなしと考へて居る者であります。それに就ては昨大正十三年上野の自治會館に於て日蓮教大國會を開催致して三箇條の方針を決議して居るのでありますから、日蓮教徒の向ふ所は既に天下に聲明せられて居る次第であります。今日は只今申す意味に於て、日蓮教徒が従々奉持し來つたところの信仰と、その信仰から導かれたるところの願行すなはち志と申しますか、この信仰と願行の二つに就ての特色をお話して、諸君と共に彌が上にも我が日蓮主義の信仰と願行を發揚發揮したいと考へるのであります。

さてどういふものが日蓮主義の信仰であるかといへば、いろいろの特色を有つて居ると思ひますが、中に三つ四つの特色を擧げて見たいと思ふ。

### 一、強大なる安住

へんごしたのであるかといへば、即ち最も麗かなる所の光を人々の心の中に與へ、正しいところの道の人々に教へるが爲に彼は山を下つた。その下の以前に彼は既に強大なる安住點に達して、何物もはやそこに不足を感ずるものはなかつたのであります。その時その際に彼は頭を斬られても、満足の笑を以て終るものであります。一點求むる物なく最大の安住點に達したのであります。

宗教の信仰といふものは、もはや小さな求むるものなどは悉く無くなつて、これ位有難いことはい、これ位満足なことはない、モウ此の儘息を引取つても一點うらむ所はないといふ境遇に達したのを、これを宗教の信念といふのであります。それを彼は美事に満點的に得て居るものであります。誰でも一心台掌のその時には、此の儘息を引取つても宜いといふ態度を示して居る譯なのであるけれども、併し愈々白刃首に臨めば「あッちよつと待つて呉れッ」

それは日蓮主義の信仰には第一に強大なる安住、非常な強い恩恵、自から安んずるところの信心を有つものであります。一たび日蓮主義の信念を握れば、もはや何物も天下に恐るべきものもなく、怨む所も悲しむ所もなくして、一七萬事成就せりといふ強大なる安住點に達するものであります。日蓮聖人が初めて房州清澄の山頂に立つて、旭日の昇る時分に合掌をして「南無妙法蓮華經」と十たびばかり聲朗かに唱へた時には、彼は今申すところの最大最強なるところの安住點に達して居つたもので、彼の心境に動いて居るところのこの信念といふものは、何物を以ても動かすことも出来なければ更へることも出来ない、彼の得て居る信念は世界よりも大きいものであつたと申して宜いのであります。彼がその信念の告白を了つてその山を下るときは、もはや彼は天下に求むるものはなかつたのであります。唯だ大いに與へんとして彼はその山を下つたのである。何を與

と言つて、この合掌して居る手が動くでありませう、けれども日蓮は白刃首に下るときも、この合掌した手は決して動かなかつた。その事は後に迫害が屢々襲ひ來つたに就て、彼の安住が如何に強大なる力を有つて居つたかといふことは體驗せられた次第であります。

斯の非なる鞏固なる安住！如何なる物にも動かされぬ、如何なる物にも奪はれない、如何なる物にも影響を更けないところの、即ち海の中の巖石の如く、怒濤がこれに打つけ、てその面を洗ふても、波浪去れば舊の態を以てその儘屹然として居る、如何に太陽の光が永い間それを照したからといつても、彼は少しもその形状を變じない、幾日大雨が降り續いてこの巖を洗うても、雨が霑れればやはり舊の姿を現はして居る、船を覆し、家を倒すやうな大風が吹いても、海中の巖石は少しも形を變じない。恰度そのやうな鞏固な、所謂磐石の如き安住を握つて居

るものを日蓮主義の信仰と申すのであります。さういふものが、今日の日本人に入用なのであります。現代の日本人の要求する宗教の信仰は、さういふ強大なる安住點を有つて居るものでなければ役に立たないと吾々は考へて居るのであります。

## 二、潑刺たる生氣

いま一つ日蓮主義信仰の特色を申しますれば、その信念に生氣潑刺として居る點であります。消極的な、滅入つて行くやうな信仰もある、だん／＼信念が熱して來るほどモウ人生に對する希望などは無くなつて、唯だ未來の往生といふやうなことを考へて願へ聲になつて行くやうな宗教も世の中にあります。さういふ信仰は今の日本人には必要はないのであります、如何なる場合に處してもその信念燃ゆるが如く、災々たる焰の如き生氣、活力を有つて居るものでなければならぬと存じます。それが今の日本人に

とき、そこに向つて題目を唱へたといふことは、朝はすべての物の生氣潑刺として生れて來る有様であります。旭日といふものは最も活き／＼として希望に満ちたるものである、日本の國運はとよさか上る旭日の如しといふことを謂ふが、それと同じ發展發揚の生氣を以て唱へ出されたものが即ち「無無妙法蓮華經」であります。それ故にこの南無妙法蓮華經の音聲の中には、自然にさういふ生氣潑刺たるものが含まれて居るのであります。であるから芝居をやつても、南無妙法蓮華經と唱へられては首が斬れぬといふことを申して居る。これは龍の口の場合ばかりではない、唯だ舞臺の上で芝居をやるのでも、イザ首を斬らうとなつて「サア覺悟はよいかッ」：「ヤツと刀を振上げたときに、端座合掌して「南無妙法蓮華經」とやられると、刀を持つて居る奴の方へ「ヘッ……ダチ／＼となつてどうしても首が斬れないといふ。それ程に非常な強味を有つて押切つ

最も必要なことであります、社會事情の變遷に就ても、或は國際關係から押寄せる太平洋の波荒きに就ても、如何なる場合に處しても生氣潑刺、炎々燃ゆるが如き所の精神を以て國民は立たなければならぬのである。世の中の人びがみな「これは大變な事になつた」と言つて腰を抜かすやうな時でも、平然自若としてにつこり笑はなければならぬのであります。今の精嚴丸の映畫にもありましたが、彼の日靜上人に扮したのは唯だ一個の活動俳優でありませうけれども、本當の日靜上人、その日靜上人を生んだ本當の日蓮聖人の本元へ戻せば、如何なる事變がそこに突發しましても泰然として少しも動かない、さうしてそこに何時も生氣潑刺として居るところのものである。

その事はいつも日蓮は申して居るのである。日蓮が初めて題目を唱へ出した時のその態度も、旭日が太平洋上に現はれて來る其の光の始めて東天に輝くて行くところの力を有つて居るものである。これは小さな理窟や議論ではない、事實この題目の聲の中に雄大なる生氣潑刺たるものを含んで居るのである。であるから軍隊などに於て獎勵すべき宗教は、どうしても日蓮主義が最も善いのである。それは吾々が日蓮主義を奉ずるから手前味噌を以て申すのではない。軍人が一たび戦線に立つて、大敵を前に控へてこれより突貫ツ……といふやうな時分でも、その時に變てこな願へたやうな聲を出してはどうしても工合が悪い、聲といふものは士氣に大關係のあるのである。その時に願へ聲で「ナンマイダ／＼ブル／＼……といふやうなことになつたら、傍の者にまで非常な悪い影響を與へて元氣は無くなつてしまふのである。それを胸を突き出して勇ましく「南無妙法蓮華經」とやれば、必ずやそこに燃ゆるが如き生氣が全體の軍人の間に横溢して來るのである。これはもう論より證據、一たび實戦に参加した經驗のあ

る人は何人も承認する所でありませぬ。

それが日蓮主義の中に含まれて居るところの信念でありませぬ。それ故に日蓮聖人は一代を通じて不思議な勝利者であります、一方から見れば非常な迫害多難のやうであるけれども、如何なる場合にも彼は負けて居らないといふことが、又大きな事實であります。日蓮は小松原といふ所で暗殺をされかけたのであります、その時弟子の鏡刃房といふ人は殺され、日蓮聖人も眉間に疵を受けられたけれども、併し日蓮は命を喪はなかつた。却つて日蓮を暗殺しようとした地頭景信といふものは、その歸りに落馬してそれから發熱して遂にその爲に死んでしまつたのであります。結果から見れば日蓮の方が勝利者であります。又龍の口の頭の座の難に於ても、これは歴史に於て有名な事實となつて居る通り、やはり頸を斬ることが出来なかつたのである。形から見れば日蓮は頸を斬られに連れて行かれたのであるから、負けて

人を助けた、さうして日蓮は終に伊東を風化して、伊東朝高といふ伊東の地頭も歸依したといふやうな次第で、日蓮聖人伊東在島中に於ては非常な感化をそこに及ぼしたのであります。表面は流されて居る流罪人のやうであるけれども、その土地の地頭が歸依をして、御馳走でもナンでも持つて行くやうなことになつたのであるから、これは非常な勝利と言はなければならぬ。又最後に佐渡ヶ島に流された時分にも、鎌倉幕府は日蓮を憎んで、どうしても日蓮を再び生かして鎌倉へは歸さぬ、海底の石が波の上に浮ぶことがあらうとも、日蓮は再び鎌倉には歸さぬと言つて居つたけれども、而も日蓮はこれに對して、「日蓮は必ずや生きて鎌倉に歸つて見せる」と言うて居つた。事實はその通り生きて歸つて居るのである、遺文の中にある通り、「千尋の底の石は浮ぶことありとも、生けて日蓮は鎌倉に歸すまじくと仰せ候とも、日蓮は必ず生きて鎌倉に歸り申すべく候」と

行き居るやうであるけれども、その結果を見れば即ち日蓮は合掌して題目を唱へて居る、頸斬りの役人は終にこれを斬ることが出来なかつたのである。傳説に依れば刀が折れたといふ説もあるけれども、それは或は折れたのではなからう、併ながら「太刀取まなこ眩みたはれ伏す」と日蓮みづからその時の光景を書いて居る通り、依智三郎直重は刀を振り上げたまゝ、砂の中に頭を突込んでしまつて、終に斬ることが出来なかつたのは事實である。さうして「三百人の武士ども或は馬の上に着くまゝ、或は大地にひれ伏すもあり、或は一町二町馳せのきぬ、近く寄れや、近く寄れやと呼べれども答ふる者もなし」といふ光景を呈したのは、即ち日蓮は大なる勝利者の位地に立つて居るものであります。又最初伊豆の伊東に流された時にも、粗岩の上に置きざりにされて瀟浪足を洗ひ、爲に危ふからんとしたけれども、そこに船守彌三郎といふ者が船を漕ぎつけて日蓮聖

言つた、果してその言の通り歸つて來たのである。斯の如く最後まで日蓮聖人は負けて居る所は少しも無い、負けるかの如き有様を表面は呈するけれども、而も最後に至つてはいつも必ず勝利の凱歌を奏して居る。

これが日本人の考へなければならぬ所である。日本の國家が負けるかの如き有様は、今までの歴史にもしばしば繰返されて居るのである。日露開戦の前の状態もさうであつた、對手は世界最大の陸軍國、強大國と言はれた露西亞である、日本は露爾たる東洋の一小國であつて、世界の人は殆ど問題にもして居なかつた、露西亞は日本を一呑みにしてしまはうとしたのであるけれども、その結果はあの通り、彼は勝つことが出来なかつたのである。今日の亞米利加の勢ひは甚だ傍若無人であつて、日本を一呑みにするやうな勢ひを以て脅威を試みんとして居るであらうけれども、併し日本を呑むことは決して出来

ない。さういふ場合に正義が最後の力であるといふことを確信しなければならぬ、敵を以ては負けるやうな有様であつても、正義は最後の勝利である。日蓮は身に寸鐵を帯びない、只の坊さんである、向ふは首斬の役人をはじめ皆二本づゝの刀を三百人の武士が持つて居るのであるから、六百二本の刀があるのである。六百二本の刀と刀を持たぬ者とが戦つたならば、一べんに坊主の頭が飛ぶにきまつて居るやうに見えるけれども、その六百二本の刀の方が負けてしまつて、身に寸鐵を帯びない日蓮が凱歌を奏するといふ所に、日蓮主義の南無妙法蓮華經の力といふものがあるのである。その力が今日の日本には入用なのである、唯だ打算的に向ふの國が大きい、向ふの軍隊は数が多いと言つて腰を抜かすやうな者は、題目を唱へる資格を有たいものである。

大元蒙古襲來の時でもあの有様を見たならばどうであるか、大元蒙古といふものは黒龍江の沿岸のオ

り眞劍勝負と言つて刀を抜いて向ふのである。それで危ないことはないかといふと、少しも危なくなるとその男が言ふて居る、どういふ譯ぢやといふと、ヤーツと言つて眞劍を抜いて立合つた時に、對手が大きく見えるやうであつたら、モウ逆も敵はないのであるから刀を捨てゝお辭儀をしてしまふといふ。ヤーツと言つて氣合をかけて睨み合つて居る内に、對手が弱ければだんた、小さく見えて来る、そこでエーイツと斬り込めば必ず向ふがバツナリ斬られてしまふにきまつて居るから、少しも危ないことはない。つまり敵が大きく見える間はいけませんといふ事をその人が言つたといふ話がある。我が日蓮主義は、彼の強大なる大元蒙古と雖も、小ぼけな豆みたやうな奴が来たナ」と言ふ、この剛勇果敢の精神を有つて居るもの、生氣潑刺たるものが我が南無妙法蓮華經である。

### 三、正義の熱誠

八  
ノンといふ所に出發をして、初めは十萬ほどの騎兵を有つて居つたけれども、其の鐵路を以つて四邊を蹂躪して、支那の北手の方を半分ばかり一べんに侵略してしまつた。それから今度は天竺に入つて来て北天竺を侵略し、亞細亞土耳其を掠し、獨逸の國境までも占領してしまつて、今の露西亞のモスコウであらうが、殆ど今の世界地圖に於て青色に塗つてある土地の半分ばかりといふものを一吞に併呑してしまつた。それから今度は支那の海岸線を悉く攻略して、その餘勢を以て日本に向つて來たのである。さういふ強大なる大元蒙古が日本に押寄せて來たときでも、日蓮聖人は何と言つたか「小蒙古大日本國に寄せ來る」——「ナーニ小ぼけな蒙古が……といふことを云つたのである。敵が大きく見えるやうになつたならば戦は負けである。或る武術研究家の人が、誰とでも眞劍勝負をやるといふので武者修行に出て行つた、その人はサウ強くはないけれども、いきな

九  
まだある、日蓮主義の信仰の特色といふものはその外にもまだある。それは非常なる熱誠に活きて居ることである。熱誠というても唯だ熱があるのではない、誠といふことが大事ナンである。誠心を以て、さうしてそれが熱して居らなければ駄目ナンである。たゞ酒が飲みたいからといふので一生懸命になつて居るとか、或は花札を引きたいからといふので眼を眞赤にして夜が明けてもやつて居る……そんなものは幾ら熱心になつても熱誠ではないのである。酒を飲んだり花札を引いたりする爲には誰でも夜明しをするけれども、正義の爲に、正しい道の爲に何處までも勇氣を惜まないといふことでなければならぬ。義勇といふやうなこともそれである、唯だ元氣を出して喧嘩をするのではない、正義の爲に勇むのである。所謂「熱誠」といふことは正しい道の爲に、己れ一個の利害得失ではなくして、道の道たる所以を知り、義の義たる所以を知つて、正義のためにどこ

迄も勇往果敢の精神が動いて居るのを、これを熱誠と言ふのである。

その熱誠に於て日蓮主義といふものは特色を有つて居るのである。普通の宗教信仰も、信仰といへば熱れも相當なる熱のあるべきものであるけれども、その熱がみな小さいのである。世間にありふれた宗教の熱は本當の正義から來ないのである、利己心を中心にしたやうな宗教の信仰が非常に多いのである。その點に於て日蓮主義は正義の爲に非常な熱誠を有つて居るのであります。

その正義はどういふ點であるかといふと、一つは思想の問題である。教といひ道と言はれるものに對して、吾々日本人の奉戴するものは世界に於て最も秀でたる、正しいものでなければならぬ。即ち精神文化に於て、道徳といひ宗教といふ人間の精神の奥を支配する大事なもの、他に負けるやうなことがあつてはならない。それ故に日蓮主義の主張する

宜い、マア／＼やつて置け、悪い事でもないから……」それではいかぬ。道徳でも唯だ個人的道徳や、社會的道徳や、世界的道徳だけを知つて、國家的道徳といふことがわからぬやうな者は駄目ナンである。それが今の人生を誤るのである。個人としては親孝行である、商賣勉強である、酒は飲まぬ、時間は能く守るといつても、國家的觀念が無くして「日本の國家が何だ」といふやうな事を言ふ奴は、如何に時間を勵行しようが、如何に商賣を勉強しようが、親孝行であらうが、女房を可愛がらうが、さういふ者は日本國民としての資格の無い者である、さういふ點を吟味せなければ駄目ナンである。親に孝行する事は善いことぢやないか、女房を可愛がるのも善い事ぢやないか……そんなことは分つて居るが、親孝行に眼が眩んで國家を忘れるとか、女房を可愛がることに依つて國家を忘れるとか、或は商賣に熱中するが爲に國家を忘れるとか、要するに國家

ものは、支那の文化に於ても、印度の文化に於ても、將た世界全體の文明に於ても、最も良き道徳、最も良き宗教の信仰を教として立つて居るものである。それは日蓮聖人が非常なる研鑽をお積みになつて、あらゆるその當時の文化を研鑽せられて、さうしてその中から選び出されたところの正義の信仰であります。であるから同じ佛教の中に於ても、日蓮聖人は斯ういふものはいかぬ、あゝいふものはいかぬと言はれたのは、決して彼の他の觀念から言ふのではない。信仰といふものは吟味に吟味をして、磨きに磨きをかけて、その得たる信念は世界に誇るべきものでなくてはならない、間に合せの信仰であつてはいけないといふことを、非常に強く言はれたのである。その教の正邪を吟味して、正法正義のために……といふ熱誠に於ては、實に日蓮は古今唯一人者である。

それが今の日本人には入用なのである。「どうでも

の興隆存亡といふことが分らなくなつたならば、どんな善い事をして居つても駄目ぢやないことを日蓮は絶叫して居るのである。現代人はこれを舊い思想であると言つて嘲けるやうな者が多いけれども、これは日本の國家のあらん限りは維持しなければならぬ、日本の國が無くなつたらどうか知らんが、我が國のあらん限りはこの國家的道徳といふものを中心に國民は考へて行かなければならぬ。それと同じことで、宗教の信仰にも亦捨つべからざる大事なものである。それは今日詳しくは申さぬが、特に吟味に吟味をしなければならぬ所があるのである。吟味に吟味をしなければ南北朝の正間といふやうな問題もわからないではないか。北朝と雖もやはり天子様を戴いて居る、人民を可愛がるのである、仁政を布かうとして居るのである……斯ういふことになつたならば、ごつちでも宜いではないか、南朝でも北朝でもごつちも自統ではないかといふや

うな譯で、何故に南朝の志士が苦しんだか一向わからぬことになる。今日の人間は頭腦が薄ボンヤリして居るものであるから、その大なる所がわからぬ、義の義たる所以がわからぬ、何故に楠公は南朝のために苦心したか、何故に正行は四條殿に討死をしたか、皆この正義の正義たる所以に依て彼等は南朝のために誠忠を盡したのである。

日蓮主義は即ちその事を最も方強く教へて行くところの信仰である。それ故に本當の日蓮主義の信仰であつたならば、正義の觀念といふものを少しも捨てないのである。一切の思想の問題に於て正義の觀念を維持して、そこに熱誠を有つて居るのである。日蓮聖人が龍の口に於て頭斬られようとしたといふのもそれが爲である、當時鎌倉幕府の北條氏といふものは飛ぶ鳥を落とす勢力を有つて居つた、それに對して、お前は元と伊豆の國から出て来た土民の子ではないか、然るにその勢力を頼んで皇室の尊嚴を冒

いて見ようかといふやうな、そんな個人の利害に迷うて起るやうな信念ではないのである。國家の大事を眼の前にひかへて、一方には北條の惡逆を叱咤し、一方には大元蒙古の襲來に備ふべく絶叫したる、立正安國論から起つた信仰で、即ち日蓮主義といふものである。その熱誠に於て實に日蓮主義の信念が世を益するのであります。

#### 四、二 大願行

そこで進んで次に日蓮主義の願行といふことに就て簡單にお話をして置きたい。宗教の信仰が唯だ有難いとかいふだけでは何の役にも立たないのである、その有難いといふ信念に基づいて、それが徳の母となることに於て、即ち信は道の元、徳の母なりといふことに於て、價值があるのである。この日蓮主義の今甲したやうな安住を得、生氣を有し、さうして熱誠に燃えて居るところの、この信念の中からど

して天子様を流し者にするといふやうな事は、大義名分の上に於て許すべからざる不都合である。後鳥羽天皇を、岐の島に流し、順徳天皇を佐渡が島に流し、土御門天皇を四國に流し、王子を捕へて但馬の山中に幽囚し、天皇に味方したる公卿百官を悉く東海道に首を刎ねるといふやうなことは、是れ正しく逆賊である。汝は今鎌倉に於て飛ぶ鳥を落とす勢力を有つて居るといふけれども、如何に勢力があつても正義の上から見たら逆賊であらうといふことを、單身鎌倉の街頭に立つて——今でも行つて御覽になればその遺蹟がある、鎌倉の大町小町の、あの幕府の館から役人共が歸つて來るところの辻に於て、今の東京でいへば丸の内やうな所に於て、日蓮は街頭に立つてこの大義を絶叫したのであります。そこから燃えて居る信念を受けて居るものが日蓮教徒の特色であります。唯だ普池のお有難主義で、八卦を見て貰はうか題目を唱へようか、それとも神籤を引

ういふ子供が産れて來るかといふと、そこに日蓮主義の願行といふ子供がうまれて來るのである。

願行といふのは願を立て、誓を立て、その事を実現せずんば止まぬといふことで、即ち日蓮聖人のお言葉を藉りて申せば、「我れ日本の柱とならん、我れ日本の眼目とならん、我れ日本の大船とならん」と誓ひし願やぶるべからず」と言つた、この「願やぶるべからず」といふことが日蓮主義の願行といふものである。世間の宗教信仰では、やたらに「大願成願」ナンと言つて手拭に染め抜いて澤山ブラ下げて居るけれども、それは皆小さな願ひ事である。或は神籤を引いて「ごうか大吉が出ますように……」とか、或は「百圓の無盡が當りますやうに……」とか言つてお賽銭を上げて拜んだところが、その晩に無盡が當つた、「アッ大願成就……有難い……」と言つて鳥頂天になつて居るけれども、そんな小さな事が當つたからといって、大願成就でもナンでも



ない。さういふ風な今日ありふれた宗教に依つて割かれて居るやうな小さな願ひ事、或は商賈が繁昌し、ますやうにとか、或は病氣に罹らないやうにとか、永生の出来ますやうにとかいふやうなことは、それは今日の文化の進歩に依つて、高貴上のごとは一生懸命に勉強すれば宜い、身體のごとは衛生に注意すれば宜いので、そんなことは宗教に頼らなくとも、各々人智の發達に依つて目的の達せられるべきことである。左様な科學や知識の力で間に合はない所に、初めて精神の奥の道義および宗教の高潔なる信念を要するのである、それが宗教の本領である。そんな教習竹庵の眞似をしたり、八卦見の眞似をしたりするやうなものは皆まやかしものである。さういふものはモツと世の中が進んだならば決して認めらるべきものでない、それは皆警視廳の手を経て刑務所へ送らるべき手合である。

我が日進主義に於て教ふるごころの願行といふ

の利害に迷うて正しき教に敵し、國家を忘れるやうな者が居るのである。それはウツかり甘く考へて居ると飛んでもない間違ひが起る、なか／＼今の世の中には、自己の利害のために國を忘れ、教を忘れるやうな不屈き千萬の奴が一パイ居るのである。その居る證據は監獄へ行つて見たらわかる、監獄へ行つて見れば、人を殺したとか、或は泥棒をしたとか、詐欺をしたとかいふ者の爲に、日本中の監獄は何處も彼處もみな一パイである、満員札止といふ譯ぢや警察の留置場へでも行つて見たならば、僅か八疊敷ぐらゐの所に二十人も押籠められて、まるで犬の仔のやうになつて寝て居る、實にひどい有様である。それも微罪不檢舉といつて、少し位の罪は見逃してやる、それから性質の善い奴は執行猶豫といつて牢へ入れることを見合せてやるといふ風に、成べく牢若しも微罪でもドシ／＼檢舉し、執行猶豫を無くし

ものはそんなものではない、細かく言へばいろいろに分れて来るけれども、大體は二つの事柄である。それは先づその反對の方を言へば「破法、破國」と日進聖人が始終言うて居るのであるが、法を破り國を破るやうな罪惡を犯す者と闘ひを聞くのである。さうして一方に正しき法を立て、國を安らかにし、國を護つて行くといふ立正安國——即ち正しき法を立て、國を安らかにし、法を破り國を破らんとするごころのものと闘ひを聞くといふことが、日進主義の願行である。

いつの時代でも必ずしも正しい者に味方をする者が多いといふ譯にはいかぬのである。大勢の人間の中には、いつも正しい者に與するごのみ言へないのである、いつも國を護るごのみ言へないのである。表面は成程徳心を一にして世々厥の美を濟すといふことである、それは奇麗に言へば左様であるけれども、日本の歴史を顧みて、いつの時代にも自己

たならば、それこそ今の二倍、三倍の監獄を拵へても這入り切れぬといふほど、今日の日本人は罪惡を犯して居る。それは法律上の罪惡でさへさうである、況してやこれを道徳的、宗教的の日本の善良なる風俗習慣から嚴密なる調査判斷をしたならば、これに幾十倍の犯罪を犯して居る者が無いとは言へないのである。それ故に諸君等のやうな願良なる人々、諸君等のやうな高潔なる人達は、この恐るべき國民の腐敗墮落に對して闘はなければならぬのである。その闘ひは所謂教といふものを大切にすること、これを第一にしなければならぬ、第二には國を護るといふことを考へなければならぬ。教が廢れてしまへば國は護れない、國を護るといふやうな立派な精神は教に依つて教化されなければならぬ。一旦教化を除去した時には國民はみな自利心に流れて我が身勝手の手考になり、そこに臆病になり卑怯になり、終には敵國から賄賂を取つて或は露採となり或は米採

となる者がナンボでも出来る。彼等はみな卑しむべき者である、理窟は如何にうまく言うて居つても、國家を忘れ正しき教を忘れて、左様な一身の利害に依つて動くやうな者は、實に怒れる奴共である。それが併し漸づる色もなく公々然と理窟を言うて居る、今日は實にあらゆる誤れる者が大道を濫歩して居るのである。茲に於て日蓮主義の願行といふものは、一層鞭つてこれを發揚發揮しなければならぬ、即ちどうしても正しき教を立て、國を護るといふことに國民を導かなければならぬ。

五、正法の擁護

その正しき教といふのは何かと言へば、サウ面倒な事を日蓮主義は言ふものではない。正しき教といふのは、神ながらの教から来て居るところの國體の觀念といふものを忘れてはならぬ。如何なる宗教を信じようが、如何なる道徳を學ぼうが、日本人であ

る以上は、日本の建國以來傳はるところのこの一種卓越せる國體といふものを重んじなければならぬ。國體の事は面倒に言へば長いことだけれども、天照大神よりして皇統一系萬世に傳はり、億兆心を一にして世々厥の美を濟したる、この忠君愛國の觀念の源たる大和皇國といふものは、他の國の政治體などに依つて眞似をすべきものでないといふことを、嚴然とさめて置かなければいかぬ。これは學說や理窟ではない。その教が神ながらの教である。教育勅語の初めにもある通り、皇祖皇宗國を肇むること宏遠に、徳を樹つること深厚なるその中から生れた克く忠に克く孝にの道徳といふものは、この國體の精華として發して居るものである。國體がなければ忠孝の道徳といふものは無いのである、それを力説するものが日蓮主義である。それが爲に日蓮聖人は北條氏と闘つたのである、汝は國體を破壊するものぢや、畏多くも天子様を流すといふことがあ

るか、遂にその罪を謝せよといふことを詰問を試みたのである。他宗の坊さんはいろ／＼言ふけれども北條の武運長久を祈つて油揚を貰つて尾を振つたから、さういふ間違つた坊主は由井ヶ濱に引き出してその頭を剣ねよと絶叫したのが日蓮聖人である。今日でもそれが一番危険ないのぢや。民衆の機嫌を取るが爲には政治家の議論も利己心を煽るやうになり、大勢の者が一身の利害に依つて動くやうになる。國家の興廢などいふことを言うてもいかぬ、この目前の生活難を如何にするか、自分の住居もなければ食ふ物もない、これをどうして呉れる……と言つてワイ／＼騒ぎ出して市役所へ押寄せたりする、一應は尤もに聞えるけれども、併し一たび國家が衰へた時には、唯だ食ふ物が無くなり、着る物が無くなるどころの騒ぎではない、この國民の最も尊いところの獨立自尊の精神といふものが奪はれてしまふのである。國家の尊嚴といふものを奪はれてしまつ

て、大和民族の數千年來傳つたところの光榮といふものは全滅されてしまふのである。國家さへ儼存して居れば、一時は裸體で居つても又働けば着物も出来る、食ふ物も出来るといふ譯だけれども、國家が侮辱せられ、日本民族が蹂躪せられた時に於ては、たとひ美味い物が食へるやうになつても、再びその汚辱を取返すことは出来ないぢやないか。それがわからぬ手合がウジャ／＼して居るのぢや、さうして目前の利害をやかましく言ふ者が澤山ある。その時に日蓮聖人は皇室の尊嚴、國家の大事といふことを絶叫したのである。

それが神ながらの教といふものである。日本人は一身の利害に迷つてはならない、一旦緩急あれば義勇公に奉じて、天壤無窮の皇運を扶翼するといふことが、一切の善い事の中の頂點である。これに比べたならば他の事は一切みな軽いものであるといふことを決定であるのが神ながらの教である。いくら西

洋の學問をやつたからといつて、これが爲に迷うて神ながらの眞髓を忘れるやうな者は、みなやう損ひの馬鹿者である。

モウ一つは聖人の教として傳はるものがある。これは天道明德、仁義忠孝の教といつて、天道のあらたかなることを信じて自分の心の明德をあらはし、この明德の中から仁義の心、即ち仁のやさしい精神、義の正しい精神を磨いて、その正しい精神の中から忠孝の道徳を發揮して行くのが聖人の教である。どのやうな善い事をして、忠を忘れ孝を忘れたならば他の善い事はすべて役に立たぬといふのが聖人の教である。即ち「己れを深くせんと欲して大倫を紊る」といふのはこれを警めた言葉である。例へば有島某とかいふ文士の相當名のある人が、輕井澤で女と一緒に首を吊つて死んだ、それは成程女との關係だけから言つたならば、戀愛といふ事が純潔だとか神聖だとかいつて首を吊るといふことは悪くないか

新豚といふものぢや。さういふ事にならぬやうにといふのがこの「義」といふ一字である、義の一字は尊いものである。西洋の倫理學などをやつたところが、唯だダラ／＼理窟の講釋ばかりして居つて、落着く所がわからない。吾々は有難いことには「義」の一字を知つて居る、「義」といふ一字を忘れなかつたならば宜いのである。元祿四十七士の行爲も義の一字で立つて居る、乃木大將の行爲も義の一字で立つて居る、楠公の行爲も義の一字で立つて居る、さうして日蓮聖人も義の一字を以つて立つて居るのである。この「義」といふ一字を忘れさへしなければ、如何なる倫理に向つても快刀亂麻を斷つが如くにやれるといふのが聖賢の教である。斯ういふやうなものでは世界中の書物をひつくり返しても何處にもあるものではない。この「義」といふことに依つて表はされる所の聖賢の教といふものを忘れるなどいふのが、日蓮聖人の力説した所なのである。

も知れん、單に二人だけの關係から考へたならば、あゝその女が可愛い、お前ならばニコ／＼して首を吊る、今自分たちは決して悲しんでは居りません、笑つて死に赴きつゝあります……といふやうなことが言へるか知らんけれども、それは唯だ女の事だけ考へて居るからである。有島といふ人の家庭にはまだ年老いたお母さんも世に御座つたのである、子供も數人あつたのである、そればかりではない、まだ日本の國家の大事といふことがある、日本の同胞國民の前途といふものがあるのである。その國民を忘れ國家を忘れ、皇室を忘れ親を忘れ、兄弟を忘れ子供を忘れて、ただ女の尻を叩めて笑つて死ぬといふやうなことは、それが即ち大馬鹿といふものである。さういふ事を學者といふ名前の附いて居る者が煽て上げて、さうして戀愛至上主義であるとか、戀愛は神聖であるとかいふやうなことを言ふ、それを新人だなどと言つて居る、それは新人ではない、

モウ一つは佛の教である、佛の教といふものは何かといつたならば、人間といふものは生死の問題に處してとかく惑ふけれども、併ながらどうせ人間は死んで行くものぢや、虚しく死んでしまつては何にもならない、必ずや志を立てたる事に依つて意義ある人生を送つて行かなければならぬ。生れ代り死に代りする間のことを考へて見たならば、いつでも単に未練な事をして、「死にともない／＼」と言ひながら、或は赤痢に罹つて死んで行くとか、或はチブスに罹つて死んで行くとかいふやうなことになるのである。近頃もだん／＼相當地位ある人が死に居るのを見ると、大抵は何でもない事で死に居るやうである、或は西洋料理をあまり食ひ過ぎて、その中の菜葉に微菌が附いて居つたのだサウナ……といふやうな譯である。さういふ事で死んで行くといふことになつたならば、如何にも氣の毒なことであるけれども何の價値もない。どうせ人間は死なねばならぬも

のであるから、時と場合に依つたならばこの一命を意義ある事に捧げて、道のために、國のために、人のために、或る大きな目的のために身命を惜まぬといふことが、これが佛の教といふものである。「身命を惜まずして但だ無上道を愛す」といひ、「身は輕し法は重し」といふやうに、正義の觀念に於てはこの身命といふものは輕いことぢや、所謂義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟するといふことの徹底したものが佛の教である。

いろ／＼さういふ善い事を取纏めて、神ながらの教も聖賢の教も佛の教もこれをコンデンスして結晶したるものを、これを日蓮聖人は「正法」と名けて居るのである。決して亞米利加や英吉利から借りて來ないでも、日本には東洋文化の精髓が留まつて居る國である。神州由來正氣あり、東洋文化の正氣精髓は日本に留まつて居るからして、日本人たるものは違かにこの精神を喪うてはならない、それが正し

### 六、護國の忠誠

モウ一つは國を護るといふことが大事である。今日は長たらしい話はやめて一言にして言ふならば、國民すべての幸福は國家の興隆に在るのである。ナシと言つても現代の世界の文化は、國家と國家の對立的文化である。露西亞のやうに大革命をやつて共產主義を振り翳して國家といふものを輕く視たといつても、今ではやはり「勞農露國を承認せよ」といふことを世界に向つて要求するのであつて、日本の國民と露西亞の人間の間の關係といふものも、露國と日本といふ國家的交渉談判に依つて一切がきまるのである、永い間摺つた揉んだをやつて居つた日露交渉のカラハンといふ者も、あれが露國の代表でなくして唯個人のカラハンぢやといふことならば、日本でも對手にしやしない、彼が露國といふ國家を代表するからして初めて話になるのである。今日支那

を立てるといふことである。ナニも西洋の文化を一顧に排斥する譯ではないけれども、西洋の倫理學、西洋の宗教、西洋の左様な精神文化といふものが一々尊いものではない、参考にはするが宜いが、参考にするだけのものであつて、それに感染れてしまつてはいかぬ。

よきを採り悪しきを捨て、外國に劣らぬ國となすよしもがな

と明治天皇の仰せられた通り、どこまでも日本は日本の獨立の地歩を維持し、自尊心を喪はぬやうに行かなければ、國民精神の剛健といふことを期することは出來ない。日蓮主義は即ち國民精神の剛健の親玉である、その標本である。日蓮ぐらゐ國民精神の剛健を徹底的に發揮したるものはない。世界を見渡して、月氏震旦一閻浮提ひろしと雖も、八萬の國ありと雖も、その中に於て日本のような立派な國はないといふことを日蓮は絶叫をしたのである。

が弱つて居るといふのも、國家としての結合が弛んで、箱が弛んで居るからして、領土は大きい、人口は多い、大きな酒樽みたやうなものではあるけれども、水が漏るといふので價值がないのぢや。世界的平和とか人道主義とか言つても、やはり亞米利加であるとか英吉利であるとかいふやうな國が、國家的の勢力を以つていろ／＼都合の好いやうな事を言ふのである。國家が衰へてしまつたならば、内に國民の幸福を保障することも出來ず、外に自分の理想を世界に持ち出すことは出來ない。國家の結合を破壊されたならば國民は皆立ん坊、風來坊になつてしまつて、あつちへ行つても邪魔にされ、こつちへ行つても邪魔にされて、滿洲へ行つても蹴飛ばされ、朝鮮へ行つても痰を吐きかけられるやうなことになるてしまふのぢや。それは事實である。いろ／＼に言ふけれども兎に角日露の兩戰役に於て、軍人の力に依つて非常な勝利を得たといふことが、今日の

日本の國歩を定めて居るのである。この軍人の功蹟を忘れて學者が徒にペイ／＼言ふやうになつたのは、所謂文弱の弊國をあやまるといつて、危い事がその中にあるのである。日本の今日あるのは、確にこの兩戰役に勝利を占めたからである。あれが若し敗けて居つたならば、今ごろ日本といふものは非常なえらい目に遭はされてしまつて居るに違ひない。現今の状態から考へるとその内にどうしても一たび戰爭があるかも知れないが、それが又實に恐ろしい戰爭である、日本始まつて以來曾つてないところの、國家の運命を試すべき一番大きな戰爭である。その時に若しも敗戦の憂き目を見るやうなことになるならば、祖宗三千年來のこの光輝ある歴史も滅亡に向つてしまふのである。諸君等の生きて居る間に起るであらう、是非ともこの戰爭に勝利を得なければならぬ。軍人は誠心誠意愛國の熱誠に立ち、これを後援する國民の精神が舉國一致して、さうしてそ

ここに天佑が我れに下つて、この六千萬國民が皆大和魂に燃えてあらん限りの人の力を盡し、そこに天の力を得て、さうして憎むべき敵國を粉碎しなければならぬのである。

この重大な責任のある國民の爲には、どうしても國家觀念に活きた宗教でなくてはいけない。ヘナヘナした事を言うて、地蔵經などを讀んで、子供が死んで賽の河原に行つた時分には何分よろしく……といふやうな、そんな宗教では役に立たぬのぢや。一人や二人の子供の賽の河原の問題ではない、同胞六千萬國民の子々孫々に至るまで、大和民族の將來の運命を保障しなければならぬ秋である。曾に六千萬の日本國民ばかりではない、この日本人の背後には亞細亞民族の十二億の有色人種が、日本を先に立て、「どうか頼む」と言つて掌を合せて拜んで居るのである。この有色人種の運命のために、日本人はさうしても正義の戰爭に進まなければならぬ。それ

にはどうしても愛國精神に活きたる宗教でなくてはいけない。だん／＼日本が榮えて行つて他に敵が無くなつたら、その時は落ついた暢氣な宗教でもよからう、般若心經みたやうなものを讀んで色即是空空々寂々ボク／＼……でも宜からうけれども、斯の如くに四面虎視眈々たる状態の裡に在る日本民族としてはそんな暢氣なボク／＼といふやうな譯には行かない。どこまでも剛健なる氣象を養うて、日本人が起たなければ眞の世界の文化は開けないといふ使命に活きてやつて行かなければならぬ。

そこに日蓮主義の願行といふものがあるのである。日蓮主義の願行は要するに立正安國——正しき教を立て、國を護り、日本の使命を通して世界の眞の幸福を保障するのである。世界をいぢめるのではない、正義に敵するものを粉碎して、最後日本の手で世界の人類に本當の正義と本當の幸福を與へてやるのである。私は斯様な意味に於て、今日の日本

の國にはいろいろ時代の要求はあるけれども、その最も根本的な所に斯の如き日蓮主義の信仰と願行とを彌が上にも燃ゆるが如くに發揮致したいと考へて居るのであります。

## 大僧正本多日生貌下著 國と人と教

一部 金拾五錢 (送料二錢)  
拾五部特價金壹圓 (送料共)

名古屋市東區田代町  
發行所 統一編輯局  
編輯名古屋一〇八一九番

容易ではないか」  
と更に叱咤する勿れである。彼には餘りに異つた道であり、彼には餘りにかけちがつた生活であり、更に彼には始めての、世界であるからである。

彼の友人は、私のこゝろ夫れ自体である。

酒をふくんで陶酔の夢郷に彷徨し、異性を求めて運愛に耽溺し、邪道から邪道へ、盲目の漂泊を續けてゐたものは、彼である。

然し夫れは過去に於ける「彼」である。  
永い間、アオダマな生活をくゞつて彼は、

漸く眞人生の一里塚に達した。

而して彼は、現在に於ける「彼」は、今や人生の眞意義を伴侶とせる道へ迫る可く、そのマイル・ストオンに立つてゐるのである。

彼を低きより高きを仰がしめ、邪道より正道へ誘導したものは彼の友人である。そして未來に向つて、彼を祈願の彼方へ誘導せんとしてゐるものも、又彼の友人である。

彼とは！ 私夫れ自体である。

置く可く餘りに容易く、誤る可く餘りに難易な人生を、彼は常に歩ゆもとうと第一歩を掲げてゐる。遠逝、四隣のきざしはその第一歩より支へぎつてゐる。今、彼の目前に展開してゐる一派の白道は、餘りに白く、滑らかにある。過去に於て彼の目に觸れたもの、捷てが騰く……黒すんたものばかりであつたことを思ひ、未來に進むこの眼前の白道が、餘り滑く香かしいものであることを考へる時、

彼が到然、彼自身のザレンマに乗せらるゝことを、愚かじき沙汰と嗤笑する勿れである。何となれば、彼は眞剣であるからである。「彼の眞剣であればあるほど前途の白路は

されど、この先きに於て、祈願の彼方へ、漢達せんとする勇氣と運達のこゝろに頼ち打たれつゝ、第二歩、第三歩を迫る彼を見送り給へ。如何に勇ましく、如何に熱烈に、如何に精選の跡を印してゆくのを知られた時、彼が過去に於けるあやまてゐるわざも捷て寛容する心に支配されることであらう。

彼は信じてゐる。  
一人のほとけだけは、誰一人彼の保護者たるを辭しても、ほとけだけは「こゝろ」を。これは彼の友人の共に味ひ、考へ、背きつゝある信念である。

マイル・ストオン上にある彼と、彼の友人とに對して、總ての精選よ、祝福あれ！

(この一文は、永い前に書いた私の宣言書である。)

# 日蓮主義より見たる無量義經

(第二十二回)

井 村 日 威

善男子、第二是經不可思議功德力者、若有衆生得聞是經者若一轉若一偈乃至一句則能通達百千億義無量數劫不能演說所受持法、所以者何、以其是法義無量故 下略

第二の義生不思議力の文である、前品説法品の中に、無量義は一法より生ずと説いて、其根本の「一法即ち實相無相の」一法を説き示して居る、其根本の「一法」を信じ、諸法の本源を知るが故に一切萬法に通達し得ることが出来る、枝葉を捉へて居るならば何時まで経つても根本を知ることが出来ないが、根本を知れば枝葉は自ら分明して來ねばならぬ、そこに大い

なる意味合がある、折角の骨折も捉へ處が悪ければ、勞して功なきの結果に陥るのである、日蓮聖人が我々に本門の本尊を顯して、數多くある本尊の中に本門の本尊が根本であることを示し下されたのは、我等末代鈍愚の衆生をして行淺功深の結果を得せしめんと御努力下されたので、其難有御思召に感佩せねばならぬことと思ふ、今の文は其意味を教へられたのである、其根本の「一法」を握るが故に握る處は一つであるが、其が根本の「一法」である故に百千億の義に通達し得ることが出来るのである、佛教研究者が佛教を適當に了解し得ざるは、根本を捉へ得ず、枝葉に没頭するが故である、根本を捉へ得たならば、一時に百千億の義に通達し得て、佛教の全軌一時に了

解し得るに至るのである、其根本を握り得ることが、佛敎信仰の上には重大な要件である、今如來の敎に隨順して其根本を得たるを是經の不思議の功德力として十功德の中の第二に擧げたのである。

善男子。第三是經不可思議の功德力者。若有衆生得聞是經若一轉若一偈乃至一句、通達百千萬億義已。雖有煩惱如無煩惱出入生死無怖畏想於諸衆生生憐愍心於一切法得勇健想如壯力士能擔能持諸有重者。是持經人亦復如是。能荷無上菩提重寶擔負衆生出生死道。未能力度已能度彼。

第三船師不思議力である、後に船師の譬喩を擧げてある所から斯く言ふたのである、此經を信ずるものは諸法の根源を握つて百千萬億の義に通達するが

煩惱を斷せずと言へば我慾を恣にする様になる、それは何らも間違ふて居る、煩惱あれども無きが如く、生死に出入して怖畏の想無きものであらねばならぬ、此が眞實に大乘の敎を行すものと云ふのである、現今の日本の佛敎は大乘佛敎とは稱するがある、眞の大乘の意味を理解して居るものは無いと言ふて過言ではあるまい、恬淡無慾を標榜する禪坊主と我利我慾に囚はれて迷信を鼓吹する墮落坊主との寄合が日本佛敎である、今の佛敎者の一人もが「諸の衆生に於て憐愍の心を生じ一切法に於て勇健の想を得た」るものは有るまいと思ふ、それでは大乘佛敎の意義は何處にも見出すことは出来ない、佛陀の理想は蓮華である、蓮華は泥中に其根を置いて、而も土泥に汚れず清淨なる花を開くことが貴いのである、煩惱の泥の中に根ざして居つて、衆生救済の大善事の花を開く事が菩薩行として最も價值のある處である、自ら無上菩提の寶所に至らんとして、此敎に入り信

故に更に其悦を他に煩ち與へて共に無上菩提の寶所に至らんと志ざすのである、此は大乘菩薩の行願として斯くの如きの行動に出でねばならぬのである、佛敎に小乘大乘の區別ありと云ふが、其實際上の行動から言ふと、自身の解脱を急ぐのと、他の人と共に解脱せんと志ざすとの差異に過ぎない、羅漢の人達は自身の煩惱を斷じて一日も早く清淨の涅槃に入らんと志ざす、大乘の菩薩は煩惱を斷せずして、一人にても多くのの人々と共に菩提の途に上らんと努力するのである、今の經文に煩惱あれども煩惱無きが如しとは此の謂である、大乘の敎を行すものは總合煩惱は有つても其煩惱に囚はれない、然し煩惱に囚はれないから恬淡無慾でばんやりして居るかと言へばそうでない、煩惱には囚はれないが斷盡もしないで、其煩惱を善用して積極的に衆生救済の方面に活動するのである、煩惱に囚はれないと言へば無爲無慾の清僧氣取で何にも仕無い事になり、

仰に住することを得、一切衆生救済の大善事に關する時、自ら其責任を自覺し師子奮迅の勇猛心を起す時大功德を成辨するのである、故に第三の功德力として擧げたのである、自ら大菩薩とし無上菩提の重き寶を荷ひ、一切衆生を擔負して生死の道を出離せしむるの大功德事を成ずるもの即ち此經を信じ行するものである、然るに或は人言はん、自ら生死の道を出する能はずして他をして出離せしむる杯とは嗚呼がましきの至りであらう、と斯る考の人も澤山ある様である、自身の力の足らざるを嘆いて何事も爲し能はずと爲す人もある様であるが、今經に於ては其點に就ての御論がある、「未だ自ら度すること能はざれども已に能く彼を度せん」と云ふてある、自分は敎はれて居ないが彼を救ふことは出来る、自身の力は劣つて居つても所持する無上菩提の寶が貴い、偉大なる力を持つて居るから他を救ふことが出来る、其義を明かにせんが爲に、次下に船師の譬

を説かれた。

猶如<sup>ニ</sup>船師<sup>ノ</sup>身嬰<sup>ニ</sup>重病<sup>ノ</sup>、四體不<sup>レ</sup>御<sup>、</sup>安<sup>ニ</sup>止<sup>ス</sup>此岸<sup>、</sup>有<sup>ニ</sup>好堅牢舟船<sup>、</sup>常辯<sup>諸</sup>度<sup>、</sup>彼者<sup>ノ</sup>之<sup>具</sup>給與而去<sup>、</sup>是持<sup>經</sup>者亦復如<sup>是</sup>、雖<sup>ニ</sup>嬰<sup>ニ</sup>五道<sup>諸</sup>有<sup>ニ</sup>之身百八重病<sup>、</sup>恒常相<sup>纏</sup>安<sup>止</sup>、無明老死<sup>此</sup>岸<sup>、</sup>而有<sup>ニ</sup>堅牢<sup>此</sup>大乘<sup>經</sup>無量<sup>義</sup>辨<sup>三</sup>能度<sup>ニ</sup>衆生<sup>、</sup>如<sup>ク</sup>說<sup>行</sup>者得<sup>レ</sup>度<sup>ニ</sup>生死<sup>、</sup>

(下略)

船師とは船頭の事で、自身は病氣の爲に向ふ岸に渡ることは出来ないが、持つて居る船が非常に丈夫であつて、夫には向ふ岸に渡る爲に必要な道具は揃ふて居る、そこで自身は渡らないが、他の人は其丈夫な船に乗せて向ふ岸に渡らせることが出来る、云ふ譬喩である、次の合譬で意味は明了である、船師とは此經を持つ者で我々の如く此經を信するものである、我々は現在生死流轉の巷に彷徨ふて居るものである、而も百八の煩惱は我等に種々の罪惡を犯

すべく指<sup>し</sup>嗽<sup>し</sup>つゝある、煩惱の爲に晝夜に煩悶しつゝあるの状態を百八の重病に嬰ると云ふ、此煩惱あるが爲に生死流轉の身と爲つて居るのであるが故に、常恒に纏<sup>れ</sup>て無明老死の此岸に安<sup>せ</sup>りといふのである、斯る迷妄の衆生にして何等の力用は出来ないが信する處の教が貴い立派な教法である、持つて居る船が丈夫な船である、而も其教法の中には、教、理、智、斷、行、位、因、果の八法と云ふ如何なる方面にも必要な問題は悉く説き悉されて居る、此教を行するならば必ず菩提の彼岸に到達し得ることが出来る、行者自身は菩提の彼岸には行け無くとも、信する所の教法が何人でも彼岸に渡す方があるから、他の人に與へて彼岸に到達せしむることが出来る、と云ふことをお説きに成つたのである、斯様に自身の力は弱くとも信する教の力偉大なれば、大佛事<sup>ヲ</sup>成<sup>辨</sup>し得<sup>レ</sup>ることを示されたので、末法に於ける法華經行者の心得として大切な御教示である、此心持を以て隨力弘通に勵まねばならぬ。

# 法華經要文講義

## 囑累品第二十二

本多日生

囑累品はこの法華經を全體の菩薩に付囑する事を説いたので、之を總付囑と言つて居るのであります。神力品は本化の菩薩に別付囑をしたのであるが、今は進化位方の總ての菩薩の頂を摩でて法華經の付囑をせられたのであります、それ故に之を總付囑とも

摩頂付囑ともいふのであります。さうしてその付囑の内容は、前段の神力品と異なるので、前段の別付囑といふのは法華經の眞髓を弘める事を付囑したのであるが、今の場合は一代一教と言つて、一切經を法華經に纏めあげて來る所の綜合の意味を付囑したのであります。その精神を受けて、進化の代表として

出た藥王菩薩の再身天台並に傳教は、一代一教の精神に依つて、一切經が法華經の中に綜合攝取せられるものであるといふ事を明かにしたのであります。本化上行の再身日蓮としては、法華經の眞髓を究めたのであります、それは天台の「玄義」と日蓮の「開目鈔」に依つて對照をしますれば、神力品の付囑、囑累品の付囑の精神が洵に能く現れて居るのであります。

その事を心得てこの品の内容を見ますと、茲には二項を引いて置きましたが、始めの方は佛の慈悲より出でて一切衆生に智慧を施し、隨<sup>ひ</sup>に光を與<sup>へ</sup>るが如くに、凡夫に對して佛の智慧を施すのが最も大事な點である。如來は一代それが爲に努力し來つたが、



汝等法華經を宣傳する者はやはり如來に學んで、愚なる凡夫に對して如來の智慧の光を與ふる事に努めなければならぬ。その場合に懈怠を生じ、或は慳嗔の心を懷いてはならぬといふ事を懇々お示しなつたのであります、さうしてこの場合に總ての菩薩の頂を摩でて法華經の宣傳を命じ給ひました。そこで次の項に於てに一會の大衆が聲を揃へて、釋尊にお請を申上げて、世尊の教の如く當に具に奉行すべしと三遍誓ひを立てたのであります、この事が畢つて本化の菩薩は本の處にお還りになり、多寶の塔は閉ぢてしまつたのであります、この囑累品の所で法華經が一段落ついて居るのであります。古來これに異論があつて、法華經は囑累品で終つたと主張した人もあつた、ケルンの意見なども、囑累品とその以下の所とは文章の工合が非常に違ふ、内容も違ふからして、純粹の法華經は囑累品で終つて居るといふ事を言うて居ります。併し天台、妙樂、傳教、

日蓮に至つては、やはり現行の法華經の通りに、囑累品で終るといふのは間違ひだといふ意見を維持し來つたものでありますけれども、それは一個の研究題目と成る譯であります。私共が見ましても、藥王品以下は内容が餘程違つて居るやうに思ひます、併し別段に前段の義に對して害も無い譯でありますから、併せ用ひても宜しいが、若も彼の普門品が觀音が獨立したやうな意味であり、又その觀音が彌陀の弟子であつて、釋迦に服従しないで彌陀の徳を特に宣揚するといふやうな意味であるならば、それは法華經の中に置くべきものではないと思ひます。ケルンの法華經にしても南條氏の法華經にしても(南條氏のは勿論ケルンの原本を譯したのであります)觀音が彌陀の徳を十方に宣揚すといふやうな言葉が偈の中にあります、それは無論羅什譯の法華經には、普門品の偈といふものは全部無いのであります、故に天台の「文句」にも解釋はして無いので、全部無い物になつて

居る、何時からこれが混入して來たか問題に成つて居るのであります、普門品偈の講釋は道式といふ人のやつたのを、「文句」に足してその後の人が講じて居るのである、天台は全然普門品の偈を用ひないのであります。左様な譯で、藥王品以下に於て若しも法華經の中心教義の盡量顯本の精神に反するやうな事があるならば、これは斷つて捨て、宜いものであります。藥王品の終の所にも、法華經の行者が阿陀彌の國に生れられるといふ事があります、古來それは色々の意味に依つて疏通が説かれてありますけれども、そんな事に夜つて壽量品の經旨を紊すやうな事があるならば、斷り捨て、も宜い譯であります。これ等の意味に於て、囑累品以下は、同じ法華經でも先づ一段輕い意味であるといふ事は、明かにして置いて宜からうと思ふのであります。

一五六、如來は大慈悲有つて諸の惶慄無く、亦畏るゝ所無くして、能く衆生

に佛の智慧、如來の智慧、自然の智慧を與ふ。如來はそれ一切衆生の大施主なり、汝等亦隨つて如來の法を學すべし、惶慄を生ずる事勿れ。

この所は「如來は大慈悲有つて諸の惶慄無く、亦畏るる所無くして」とありまして、釋迦如來御自身で仰せられるには、自分は精神の根本に、この慈悲といふものを出發點に置いて、一切衆生を濟度しやうと思つて居るのであるから、如何に結構な智慧でも、教でも、少しも惜む所無く、又己れの教ゆる所は如何なる學說教義に對しても打破されないといふ確信を以て世に立つて居る者である。それ故に惶慄もしなければ畏れも無い、一切衆生に對してこの佛の智慧、如來の智慧、自然の智慧を與へ來つた者である。この三つの智慧は往いては同じものであります、一應別けますれば、佛の智慧は衆生を濟度

するに就いて働く所の先づ慈悲の智慧である、慈悲の智慧といふことは、迷へる者に接近して之を救ひ上げる所の應用の智慧を、佛の智慧といふのである。如來の智慧といふはその根本を成す所の智慧であつて、寧ろ衆生濟度の爲にする智慧よりは、その根本をなす所の智慧であります。衆生の心であるとか、衆生の輪廻する有様であるとか、總て一切衆生を見るに就いてのその根本を照した智慧である。自然の智慧は、衆生ではなくして、宇宙に對しての絕對原理を見開いた智慧である。左様に應用の智慧に於ても、衆生の根本を見る智慧に於ても、宇宙の本源を突き留めた智慧に於ても、悉く我が釋迦如來は有つて居るが、それを慳慳む所無くして總ての者に與へたのである。それ故に如來は一切衆生に對しては一番大きな施をしたものであつて、世間の人が佛敎を信するに就いていろ／＼施しをするから、それを施主というて居るけれども、それは僅かな物質を施す

のであつて、如來がこの大慈悲より出でて大智慧を施す所の、一切衆生に對する大施主といふことから考へたならば、洵に小さいものである、汝等佛弟子となる者は、他の者から物質の供給を受けたからと言つて、その位の事は何も意とするに足らない、寧ろ自分の本分に顧みて如來と同じやうに大慈悲を根柢とし、さうして總ての學說敎義に對して畏るゝ所無く、亦慳慳の心無くして、この大智慧を施して行かなければならぬ。

それが如來の法である、如來の法といふは、今申す所の大施主の實行が即ち如來の法である、唯だ如來の説いたお經を默讀して居るといふやうなことが如來の法ではない、活ける一切衆生に對して大智慧の光明を與へて行く、それが如來の法であるからして、その事を忘れぬやうにしなければならぬ。さうするには、この法華經に基いて如來の智慧を學ばん限りに於ては、他の方便のお經に依つてはこの大

智慧が十分に明かになつて居らぬこと故に、汝等は法華經に基いて佛法を弘めなければならぬが、併しその場合に一切經を除外してはいかぬ、一切經をこの法華經の開顯の意義の中に納めて、さうして綜合統一したる佛敎として、一切衆生を濟度しなければならぬ、その場合に左様な結構な法を得、敎を得たからと言つて、之を慳慳んではならない、「この敎は容易に得られなかつたものであるから、さう容易く汝等に與ふことは出来ない」といふやうな、所謂法慳慳に陥つてはならないといふ事を言はれたのであります。これも宗教の通弊として起る事でありまして、最初が一番善い所の敎は與へないといふやうなこと、それを藏つて置くやうな爲に、終ひにはその精神が隠れて判らなくなつてしまふ。日蓮門下に就て言うても、書量品だの本尊鈔は能化の人と成らなければ之を説く事は出来ないと言ふやうに居りました、それ故に直接書量品を講ずるとか、

本尊鈔を説くといふことは殆んど無いことになつて、御遺文の中でも一番善い所は説かないといふことになる、マア最初の中は知つて居つて説かなかつたものであるか知らんけれども、段々行き居る内にはそれを知らなくなつてしまふ、説く人が抑々知らないのみでなく、それを説かぬのであるから、弟子信者はまるきり知らない、現に日蓮門下が第一の書量品に對しての無知識といふものは實に驚くべきものである、これは本は法慳慳の所より出でたのであるが、終ひにはそれが空虚になつてしまつたのである、その事を誡めたのがこの「慳慳を生ずること勿れ」といふ經文であります。これはその内部に入りますればその實例は非常に多いことであつて、大事な書物は總べて相傳と稱して之を他に見せないものである、その爲に段々敎義が隠れてしまつたやうな譯であります。如來の遺訓に背いた失敗は歴々として我が日蓮門下の歴史にも現はれて居る、他の宗派に於ては

無論の事で、始めから眞實を學ばず、本當の所を抜きにして居るのであるから、何處まで行つた所が佛教の本旨が發掘出來ない次第である。本旨を得て居つた日蓮門下すらも既に斯の如くでありますから、全部佛教の本旨が影を潜むるに至つた次第であらうと思ひます。

一五七、時に諸の菩薩摩訶薩、佛の是の説を作したまふを聞き已つて、皆大歡喜其の身に徧滿して、益々恭敬を加へ、躬を曲げ頭を低れ合掌して、佛に向つて俱に聲を發して言さく、世尊の救の如く、當に具さに奉行すべし、唯然世尊、願くば慮ひ有まさざれど。諸の菩薩摩訶薩衆、是の如く三反俱に聲を發して言さく、世尊の救の如く、當

に具さに奉行すべし、唯然世尊願くば慮ひ有まさざれど。

次は佛のこの委託に對して、多くの菩薩が誓ひを立てるのであります、皆大歡喜を生じて、その歡喜が身に滿つるといふのは、心に滿る以上に身體にまで歡喜が溢れて、益々尊敬の心を起して、さうして佛に申上げるのであります、唯今仰せの如く、如來は一切衆生の大施主である、汝等も大施主となつて如來の遺教を宣傳せよと仰せられたことは、その仰せの通りに當に具さに奉行致して、決してこの仰せを忘るゝことは致しません、唯然世尊の「唯然」といふ事は「ハイ」といふ事で、お受けをする言葉であります、誠心誠意今の仰せを忘れぬやうに致しますといふその熱心の現はれを「唯然世尊」と申したのである。それでありますからどうか御心配下さらんやうにといふ事を三度繰かへして申上げて、同じ事を又最後に申上げたのであります。この誓ひ

はやはり佛教の歴史に現はれて參るのであります、始めに申した藥王の再身天台、傳教等が出まして、一切教をば法華經の中に綜合統一を致しました、それは洵に鮮かにその任務を果たしたのであります。續

大僧正本多日生著

## 綜合的佛教觀

◆四六版 全一冊 金壹圓五拾錢 送料 金拾五錢

著者多年大藏經全部を精研し、曾て大藏經要義を撰述し、今復此著あり、各宗の葛藤を斷破して大藏經に直面し、華嚴、阿含、方等、般若、法華、の五大部を講明し、善く佛教の眞面目を發揮し、其の綜合的版題を示す、行文流暢何人も領解し得べし、佛教の書籍多しと雖も、未だ曾て此種の著書あらず、今や日本國民は其使命を自覺し、東洋の文明に歸らざるべからず、此時此著あり、此書讀まるべからず。

大僧正本多日生師著

## うるの奥山今日こえて

一部定價金貳拾錢 郵税金貳錢 施本用特價拾部金壹圓貳拾錢(送料共)

いろは四十八文字、そこに如何の宗教を藏し、そこに如何の哲學を含める、如來一代五十年の設化八萬四千の法門は、簡約せられて四十八文字に有り、東洋六千年の文化は醇醜せられていろは歌に存す。本書は宗教界の權威本多日生師によつて、眞の人間觀、眞の生死觀、眞の解脱、眞の信仰、眞の道德を講説せられたるもの、釋尊の教に依つて光あり力ある人生の行路を進まんとする者は、必ず精讀せよ。第十二版印刷發行

發行所 統一編輯局

名古屋市東區田代町城山

電話 東五〇八七番 振替 名古屋一〇八一九番

# 價值見直し時代の時代

文學士 武田 顯 龍

## 五、知らしむべく頼らしむべからずの時代

封建時代にあつては社會制度は階級制度であつて其の組織は身分本位に依つて組織せられて居た、奈良朝の豪族全盛の時代にしても又は藤原氏全盛の時代でも武家全盛の時代でも皆身分本位であつて少數の特権者流が治者階級に屬し多數の民衆は被治者階級に屬して居たのである、従つて少數の哲人ならざる人達が一種の哲人政治の様なものをやらうと云ふのであるから被治者たる相手方が蒙つては甚だ迷惑をする。民衆を馬鹿者無自覺者にして置くことは特権者の自衛上當然の手段であつた。其處で彼等の政治方針は民は頼らしむべく知らしむべからずと云ふことであつた。新ふして我は生れながら特権者なりと思ひ揚つた馬鹿が無自覺な馬鹿を相手に政治を行つたのだから時としては暴君政治が行はれたと云ふことは當然すぎる程當然と云はればならぬ。

此の身分本位の社會組織を打破し特権者の政治を否定して國民平等を叫び天下は天下の天下なりとしたのが明治維新である。従つて維新の精神は民は知らしむべく頼らしむべからずと云ふことであつた。此の精神の具體化したものが民権自由の叫びとなり其の運動となつた。今の普通運動と云ひ國民外交の叫びと云ひ此の精神の具體化運動の繼續と見て敬て誤りはなからうと思ふ。

持して優越感情の満足を計らうと致し、此の上から人類の進歩を阻害するのみか自己自らの生存の意義すら無視する様な身分本位の組織を擁護し辯護しやうとする。斯ふ云ふ風に人間に自殺行為すら敢てさせようとする身分本位の社會組織は人類に對する阿片である。多くは斷言するのであります。

多くの保守主義者は口を開けば直に民は頼らしむべく知らしむべからずの群盲時代を恰も黄金時代の如く又は理想境であつたかの如く云ひなして今の時代を惡鬼羅刹の時代の如くに云ひますが其等の人の話を聞いて居ると「現代の人心は斯く惡化して居るが昔の人は斯ふであつた、誰彼は斯ふ云つた」と申します。誰彼が斯ふ云つたと云ふ其の誰彼が「勿かれ主義」の道徳の教を述べられたのは何を相手にして云つたかと云へば其の當時の社會人である。即ち其の當時の社會相に今日と同じやうな欠陥があつたればこそ其の誰彼は斯くの如くある勿かれと教を説いたのであつて誰彼の教のあるのは其の當時の社會相が善真であつたと云ふことを意味するよりは寧ろ不完全であつたと云ふことを裏書きするものである。

ヨサハヤンハウエムも史は時なりと云つて居るから過去の欠陥を諷刺せずには是を時化して善い方面ばかりを眺めて現代人反省の樂にするのが教化の方法として妙を得たものだと思はれるかも知れないが、其は一應尤もな説だと自分と思ふ。けれど其が直に群盲組織を肯定する理由にはならない。強いて時化せなければ見榮えがしなと云ふなら其の社會組織を肯定することは恰も阿片を飲むと少しも相違がないと云つてよからう。

と弊害とはあらう、然し人間よりも家柄の尊かつた時代人間よりも着物の尊かつた昔の時代に比すれば家柄よりも人間の尊い現代着物よりも人間の尊い現代の方が人類は祝福され文化は進みつつあると云つてよからう。佛教は人間と佛との接觸であつて家柄と佛との接觸ではない。然るに多くの佛教徒の實際は家柄と佛との接觸財物と佛との接觸になつて居る。華族や財産家であれば其の人が不信心であらうと馬鹿であらうと死ねば院殿大居士號が法名として與へられ平民階級無産者であれば僧侶家でも院院位が關の由である。是れ佛と人間との間に介在する地位が特權階級分で今尙ほ身分本位の保守思想に染はれて居る結果である。

一切群類を憐れむ心海よりも廣く山よりも高く教はんと志強きも堅き釋迦牟尼が此の社會相を睨めて黙して居られなかつた。人道主義の奥に内に燃へて居る、正義の觀念は利慾よりも鋭い、御佛は此の身分本位の社會相を打破すべく火蓋を切つた阿含經に依ると「阿難の言く我等事ふる所の師費迦沙は世々聰明にして名遠道に昇る又は是れ種種にして人に餘人に勝る天下貴ぶして士たりと雖も亦不仁なるあり而も我種は獨り殺を好まず。佛言はく吾れ本殺を惡むを以ての故に佛の無上正眞の道を求む汝定志種は但口に仁を貴びて手に殺さずと雖も心には皆殺あり今我れ佛と爲り身口意淨くして一切殺を用ひず天下の人皆殺を好む故に教ふるに仁義を以てす」と又曰く「阿難の言く佛は及び難しと爲すも天下に四種の人有り君子、梵志、田家、工伎なり、獨り我が梵種を眞且つ貴しと爲す其の餘の三輩は皆我が種に事ふ。」と又言く「阿難の母は釋家の嫡なりと信す我等今より請ふ復敬はずと佛言はく然らず世には或は母親にして而も子賢貴なるあり阿難は賢人なり驗るべからず。

知らしむべく頼らしむべからずの人間本位の社會組織の下にある現代人の焦燥不安は知つたが爲の焦燥不安であつて、惡化と見らるる思想の變化は生知りなるが故に起つた一時的现象で行くべき彼岸への一過程と見てよからう。知つたが爲に或は生知りなるが故に現代の人心の上に將た社會相の上に幾多の欠陥

分れ各階級の間に上下の區別嚴然と存して居り首陀の如きは奴隷を以て視られ社會の最下層に位して全く何の權利も有つて居らなかつた。是に反し婆羅門階級は日本に於ける華族の如く特權を有し社會の上層に位して世の中を我物類に横行し下層者を虐げ其の生き血を吸ふ吸血鬼の如き野蠻血で口には政治文教

乃至僅ひ父母俱に是れ覺醒なるも生子不肖にして中直なる所無くれば汝當に奈何がすべき皆曰く當に下座に著くべし佛言は是の如くんば貴は是れ常有らんや若し覺志の子殺盜犯法せば更當に捕ふべきや不や曰く當に之を捕ふべし汝何ぞ拒んで言はざる我種は貴なり救捕すべからずと、曰く現に罪有らば何ぞ種を言ふを得んと一誠に身分本位を打破して人間本位に立脚せられたことが明らかである。

佛教徒が身分本位の現在社會制度を擁護する爲に是を肯定し是に因果律を適用して更に十善の天子を引倒しそして今の貴族の家に産れる者は過去に良い事をした報いであると断定するのは佛敎の因果律を全然宿命論と同視するもので私の興することの出来なない点である。佛敎は人間本位を出發点とするから過去の善良な行爲の報ひは人間其自體に及ぼすべきであつて其の間へ家柄や身分を用つて來るのは明か間違ひである。善良な行爲の報ひとしては人間の本質が善良に意志和雅に然も傑物たるべき本質を備へ家人に愛敬せらるべき實を備へて産れ來ると解すべきであつて、身分本位の家柄階級制度などは佛の否定した處である。

廢子の墓に隨喜讚美の涙を流し朝井澤曾邊屋を聖地を訪ふ心持ちで巡禮するようになり斯ふして會黨を破壊するのである、其の愚や誠に笑ふべきであるが然し結婚に於て身分本位の結婚財産と人との結婚即ち蓮花のネトトギスの斐劇の舞台から或は物と人との結婚であつた紅葉の金色夜叉の舞台からイブセン劇ノヲの目撃めたる人としての結婚を願求する舞台へと時代が轉換し來つた事は私の欣快とする處であります、即ち五障三從の桎梏に捕はれ片務的道德に盲目的に服従を強いられて來た婦人が奴隷根性を脱して我も一個の人格なりと云ふ考に導り人格が有する自由の空に天驅けるべく翼を翫へつつある現状は雖ては女人とは物に隨つて物を隨へる身なり、矢の走るは弓の力豐の行くは鹿の力男のしわざは女の力なりと云ふ眞個の婦人觀に醒め來たる前提として私の大に喜びとする處であります、私は婦人の啓蒙運動が益々盛ならんことを望む一人でありませう、さりとて女人を太陽と同視し是を瞻望せよと説く女流一派の議論に對しては階級闘争を叫ぶ者に對すると同様絶對に賛同を表し得ないのであります。

教育に於ける人間本位の教育は個性尊重の

佛敎が階級制度を否定したからとて社會の統制機關を否定したものではない。統制機關は充分是を尊重し且つ是を模成あるものとして服従すべきことを教へた此の点は今日の社會主義や無政府主義と異なる處である。然し統制機關は家柄に依つて貴賤すべきものでなく身分に依つて決定さるべきものでなく人々に依つて運用さるべく適材に依つて決せらるべきものとしたのである、又人間本位だからとて佛敎は私有財産制度を否定するものではない。

私有財産制度を認めるが然し財産は自己に屬する故其の處分活用は自己の勝手だと云ふこと即ち財産に對する個人の絕對權を認めたわけではない。財産は社會の物だが個人が一時管理して居るのであつて其の財産を費消するには人の爲め社會の爲に費消すべきで一個人の享樂の爲に是を費消するは財に對する冒濫行爲であり社會の公敵であるとするのである。即ち總ての點に於て人間本位であり人間中心である、がさりとて今日の様に直に人間絕對を主張するものではなく人間が佛と合致した時即ち小なる個人が大なる佛の活現體であり佛の活動の一部であること云ふことを真

動的教育主義となつて表はれて居るが是が軌道を進むると時時自由教育主義となり更に狂氣地味で來れば長野縣で問題になつた風氣本位の教育主義となつて來る。是等は佛の活現體たる體驗と云ふことを脱した單純な浮草のような自我を絕對なりと勘違ひした弊害である。以上本稿に於ては私は頼らむべからずとなす人間本位の時代を讚美の情を以て綴りましたが敢て階級闘争を叫ぶものではないが、貴族なるが故に是を敬ふと云ふ事大主義を捨てて眞の課一貫の一人間を愛護し其處に降れたる實を有つて居たなら其の人を敬へと云ふのであります、特權だとか財産だとか云ふ背負を踏榜の切れ草鞋の様に考へ眞個の人間と人間を基本にした社會相が産れ出でようとして喜び手を携へて是が産後を務めようと思ふ者でありませう、私の望むところはお互が佛子の自覺に隨ひ佛の活動の一部分であると云ふ體驗を得て其の目醒めたる人達に依つて此の社會を組織して行きたいと云ふのであつて佛の御前に於ては世襲的に依る上下の區別と云ふことは無い筈であります、私の態度は誤解され易いと思ひますから今一應例話を擧げて態度を明にし

に體驗した時人間絕對を許容するものである。

然るに此の前提を無視して人間絕對を主張するから色々の破綻が生じて來る、思想の方面は扱て置いて實際の社 相を眺めるに例へば戀愛問題にしても戀と云ふ字を分析すれば未し糸しと云ふ心と云つて戀は割合に人間の至純な情で異性兩者間の誠の發露とも見られるものであるが人間絶對を主張する現代人は家を捨て親を捨て自個本位に逐く徹するから色々な弊害を伴ふのである。本位に置き絶對と思ふ自分は未完成であるから昨日の自分は今日の自分でなく昨日の思想は今日の思想とは異つて來る。自分で利那に變る我だのに其の我を絕對視するから利那の氣分に依つて動くようになり昨日の甲に對する戀は今日の乙に對する戀と變り糸し糸しと云ふ戀はも亦一心の戀と變つて甲に惚れたが乙にも惚れたと云ふことになり此處に戀愛の三角關係を來たし右せんか乙あり左せんか甲あり進退谷はまつて利那の自熱的戀情は遂に死を選ばしめるようになる。世に背いて戀に生きる者を戀の受難者と呼び世を捨て、戀と共に死する者を戀の殉教者と呼んで戀愛至上主義を唱へ須

て愛きたかと思ひます、私が公衆に向つて發願にならず正直に世を送らうと云ふ時に讀者の一人が其は自分に對して闘争を叫ぶ者だと云ふならば其は其の人が自ら盜賊であると云ふことを告白して居るだけで私が敢て其の人に闘争を挑んだのではない、其の人が如何様に考へようとは其は佛國で私に取つては踏榜一般の人と同様全く無關心である。私の態度は是であります、更に政治經濟宗教等に對して價値の見直しを論じたいと思ひましたが一先づ筆を置くことに致します。





童話

牛

(大正十四年一月四日)
コドモ會新巻始誌

中村にしき

はしがき

私達は兒童會を創立して、茲に四週年、
事功の見るべき者はありませんが、其の
間多少の手筈を感知するに到りましたは
誠に御同慶に堪へません。

私達が此會を創設したに付てはいろいろ
の理由はありますが、一言にして云へ
は「某教徒に「しげきされて」と、残念な
がら申より外無いのであります。

彼れ等の教義宣傳に巧妙なる、國際關
係からも、經濟事情からも、社會政策か
ら、教育方面から、其他種々あらば、教
れの方面からも、侵入を慮りつゝあるの
です。尤も國際や經濟の方面は、其の毒
牙を幾分和らげた様ですが、社會政策の
方からは、労働方面に手をのびし、教育
の方は師範教育の方面に熱烈なる主義の
宣傳に努力して居ります。

特に私達の寒心に堪へぬのは、彼等が
宗教心の發生した芽に對しまして、幼稚園、
日曜學校を設立して其の新芽に培は
んとする事でありませぬ。勿論佛敎者の方
でも此の大事な點に注意し奮闘せられる
方が、皆無と云ふ譯ではありませぬが其
れは曉天の星の如く、少數にして彼れ等
の拾得一の比例かと思はれます。以何に
も殘憤の到りてあります。

私達の郷土にも、彼れ等の會堂あり、
幼稚園あり、日曜學校も今は二ヶ所もあ
るとの事ですが、未だ其收容量は尙舊の様
子でありませぬ。推知するに之れば、從
來「蓮聖人の教義を奉じつゝ、來りました
習慣から、彼れ等の門をくゞるを喜ばな
いと云ふに過ぎないのです。此のまゝ、放任
して、兒童方面に何等の考慮を拂はな
かつたなら、前途や知るべきでありませぬ。

故に私達は此の會を組織し、微力ながら
兒童敎化に一手を染めたのです。

幸に開設以來兒童の例會に出席する者
六拾名乃至百參拾名、大官或は總會には
會員四百餘名は出席が數へられます。會
員は新法要後の禮拜や途上に會へば互
に禮を行ふ事や、會場下足の整頓せるな
ぞ、參列者側の當に驚歎する處なんです。
之れ等は別に、講話したのでも有りませ
んが、いつとなく自然に行れて參りました
事は、心ひそかに快哉を叫ぶ次第であ
ります。

以下統一の條白に掲載の榮を得るのは
耻しながら、私達の新作して、時々兒童
會に發表した童話であります。童話に成
つて居るか否かは知りませんが、何等か
の御參考になりましたら幸であります。

日蓮聖人が房州の小浜から、鎌倉へお
通りの時に、日は暮れかかるし大雨にもお會
になつたので、一夜の宿をおかりあつて、
日はくるゝ雨はふる野の道すがら
けふ笠森にのみさつるかな

とお疎みになつた、あの四方里道りで有名な
上笠笠森の觀世音を、一里餘り離れた處に内
田と云ふ小村があります。

此の村の半分はと云ふ、自分も名譽の
機にして居る、久左衛門と云ふ資産家があり
ます。多くの田や畑や山林を持つ斗りではあ
りませぬ、澤山な牛も飼つて居るので、牛久
大と呼ばれて居りました。

其の澤山飼つて居る牛の中で、目の色付と
云ひ、角の生へ具合と云ひ、體格の男大など
云ひ、何一ヶ申分のない、珍らしい立派な
牛が居ました。體全体がまつ黒ですから、
黒も彼れも、黒、黒と言つて賞めない者はあ
りませぬ。

此の近郷の習として、年一度正月五日
には、八幡様の廻りで、闘牛の會が開かれ
なかく盛んな、牛角力の會であります。
それですから、此の日には牛を飼つて居る家
では、夫れゝゝ赤や青や五色の色で塗つた、
晴れ着を牛に着せて、會場へ集まります。

牛久大と云ふ、黒一に白地に金糸の模様を
付けた、着衣を着せてつれて出ました。

近郷近在の村々からも強そな牛も出て
くるのですが、いざ「黒一」と出會つて、角を合
せて見ますと、五分間と取り纏むて居る牛は
ありませぬ。見る間に、コロコロと打倒さ
れて、中には「黒一」と見るや、土俵へ出るの
を嫌がつて、遁る者も、少くはありませぬ。

此の大臺に置かれて居る下僕の内に、正太
郎と云ふ、今年十四才になる少年が居りまし
た。

正太郎は隣り村の、誠實に賢い、慕をして
居る、太古と云ふ人の侍でありませぬが、貧乏
の爲め學校へ通はずも出來ず、尋常四年
を卒へると、間もなく雇はれて來たのです。
正太郎は賢い家に生れたにも似ず、ど、ど、
か品性の備つた、氣立の良い、正直な、その
して心切者でありますから、多勢の雇人

にも正さん／＼と言はれて可愛がられ、大臺
にも大臺目をかけられて居ます。

それ斗りではありませぬ、牛の「黒一」は、
時とする外、雇人の云ふ事を、ドカして
も聞かぬ事がありますが、正太郎には非常
に慣れて、少しは無理な事をして怒る様な事
は決してありません。

それですから「黒一」とは、お友達の様の中
好で、正太郎は「黒一」と可愛がつて居
りました。

牛久大臺は、大變な資産家でありませぬが
どう云ふ者が、七十歳の年を邁へても、まだ
購買りが定まりませぬ、大臺夫婦は、いつも
此れを悲しみまして、親戚が「養子をと、い
ろ／＼お當りを尋ねたのですが、是れと言
ふ者が見付かりませぬ。



呼ばれるので、もう出ないわけにも参りませ  
ん。ハイ、と、木小屋の隅から、眞剣な  
顔して出て来ますと、坂のから、どこに隠れ  
て居るか探す様な風であつた。「馬」は、楯  
九の姿を見るや、モウツと喚び、近よつたか  
と見る間に、角に引懸けて、二回身りも高く  
投げつけました。

楯九は投げられて落ちたに、運悪くも梅  
の切り株に胸の透りを、イヤツと云ふ程打  
付られましたので、「ワン」と云ふなり氣絶し  
てしまいました。

また「醫者よ薬よと、あつて手當の甲斐  
もなく、五日目の夜です、くぼんだ目を細く  
聞きまして、「三郎が悪いのでない、私が悪い  
のだ」と只つた一言、かすかに云つたかと思  
ふと、それなり死出の旅路につきました。

正太は、武通の後、病床を離れる様にな  
りました。大連は兩親と話し合ひまして、正  
太を養子に貰ひ受けました。(終)

(五六年生を標準として)

### 罷睡録

#### 十三、頭山翁の靴の中

名は忘れたが吉原のさる女に頭山翁が惚  
れた、惚れて惚れて惚れ抜いた振句が、お定  
りの口説きに掛つた、處が「あんな田舎ッ平  
は頭山翁」と云ふ事でも二もなく耐難な  
頂戴した。根が淡泊な頭山は強いてられ  
ちする事もなく、あつさりと手を引いた。其  
女が田舎ッ平は玄洋社の首領頭山で  
ある事を知りて残念やる方なく、今度は  
此方から甘い秋波を送つたが、一度ははられ  
た女に手練はないと、あべこへに耐難を喰は  
されて仕舞つた。が女の一念は裏の計り、途  
には心のたけを美しい紅文字に籠めて彼れの  
處へ送つた、けれども彼はてんで封を切ら  
うともせず、其まゝほんとの間に投げ出す

近來の壯舉。社會教化講習會が東京市に於て開かれ、眠れる宗教界を  
この警鐘に依つて醒し、これに端を發して今や各宗は競ふてこの種  
の講習會を開きつゝあり。我門下のこの壯舉閉ぢて今や日淺きに早  
くも一青年學生の手に依つて本講演集は世に生る。これを一讀する  
者、堂を破らんとせしあの大會場に列して、眼前に聴くの概あり。何  
人も讀まざるべからざるは本集。敢て僧俗を不論諸賢に一讀を求む。

## 社會教化講習會講演集

定價一部  
金五十錢  
要送料錢

申込所 東京市小石川區白山前町十六統合宗學林内小林啓善宛  
注意 本集は非賣品なるも日宗僧信徒の方に限り實費を以て  
頒布するのである。御註文には二部以上の方に限りお  
送りします。十部以上同時に御註文の向には一部進呈  
いたします

送金 送金は可成前金、止むを得ざる方は受取り次第御送金  
のこと。

發送期日 二月中旬頃  
統合宗學林内

### 臨時講演集刊行會

(其七)

#### 黃薇菴青村

ので有た。夫でも詰められぬと見へて、女が  
らの手紙は三日にあげず彼の許に届いたが、  
彼は一向相手にならず相變らず封を切らずに  
床の上に投げ出して居た、床の上には怒みつ  
らみの籠つた彼女からの贈答が推展くなつた  
ので有つた。

或時彼の玄圓に現はれた四十恰好の女  
將、取次ぎの案内も待たずに、すか／＼と彼  
の居間に進入りて来て「頭山さん大變事にな  
りました、彼奴は先生の事ばかり思ひ詰めて  
到頭頓氣になつて長い間寝て居ましたが  
遂に先刻息を引きとつて終いました」と涙  
ながらに物語るのので有た、彼は「さうか其は  
可愛相な事をしたな」と唯一言、  
舞臺は一轉して後年大阪に下向した  
當時大井憲大郎事件に關係が有ると云ふの

で、彼は突如然手廻りの荷物と共に檢事局に  
引ッ張られ出されて終つた。檢事は彼の荷で何  
か證據をと思つて片々箱から荷物を調べ始め  
たが、因より證據なぞの有らう筈がない。と  
最後に檢事に彼の靴を明けやうとした時、彼  
は「ど、ど夫れ計りは御難辨を願いたい、決  
して怪しいものは遣入つて居ないから」と拒  
むので有た。が檢事はいつかは聞かばこそ、  
「そんなに拒まれるのを見るも願はず怪しいと  
云ふので是非開けやうとする。」イヤ決して其  
んな譯で拒むのではない夫れ計りは平に御免  
を蒙りたい、決して怪しい物探入れて無い事  
は私が如何にしても誓言するから、夫れを聞  
ける事丈は平に／＼とひたあやまりに詫る  
ので有たが、拒めば拒むほど怪しくなるのは  
當然で「遺奴テツキ、重大な書類でも遣入  
つて居るに違いない」ともう證據でも得た様  
に喜んで、無理矢理に開けて見ると、コハツ  
モ如何に、中にあるのは先年彼を思ひ續け  
て死んだ吉原の女の懸書數十通……



れはどつちや……カームと流石の檢事も言葉が出なかつた相だが、數年後になつて旅先にて持ち廻る彼の情誼、蓋し味ひ盡せぬ深い處があるではないか。

少し超勢と云へば夫までだが、併し人間味は斯もありたいものである。部下を使用する人は何處までも情誼の深い愛撫を要する、一時のがれの使ひ放しては逆らうやないが、大にはなれない、何はしかれ酒脱豪放の、瀧山翁の通云に此遊記を聞く、成程ナアと首肯される節があるではないか。

### 一四、油斷するな

御子神典謀と云ふ武士が劍術の修むを志して、美頭有名な伊藤一刀齋老人の弟子となつた。すると一刀齋は「劍道の奥奥と云ふ處で別に六ヶ敷のものではない。たゞ油斷するな……此一事をよく守ることが出来れば十分である」と云ひ附けた。本氣になつて進んで來た伊藤に取ては、脚りに榮氣な

い言葉だつたので、「其位の手なれば今でもちやんと心得て居ります」と氣立たし氣にそつけなく答へた。

と其言葉の終つたが終らぬ時、一刀齋は傍に有る木刀を取つて突然典謀の肩をピシリと打ち下した。「これは以ての外の御無禮」典謀が恨めしうに云ふと「無禮とは何事、打たれるのは油斷があるからぢや」と一刀齋が叱つた。「此處は道場では御座りませぬに」典謀が重ねて文句を言ふと、一刀齋は「道場」に於て油斷せぬのは當然のこと、然しそれ丈では何にもならぬ、劍道は道場の中ばかりに有るものではない、走つても殺つても無に油斷のない様になつてこそ、劍道の修行は進せられたと云ふべきぢや」と思ふ云つて教へた。

典謀は此教訓を胸に疊み込んで一刀齋の許に長く足を止め、夜々と修行を積んだので、終に本堂通り無道の名人となる事が出来たのである。

## 記事

### 各地教報

#### 京都本山

二月一日開齋。三好師説教。△二日護正甘例會、佛教の大綱、原田部長△九日正行院婦人會、功德力、原田本山部長△同日成就院護正婦人會、婦人の覺悟、有田安道師△十三日宗祖會、修持會、信佛の力、萩原日道師△十四日統一團青年部例會。本日は會員各自講演し相互の思想信仰上に就て意見を交換する事にしたり。「信仰」山口燈次郎、「理性と信仰」秋山祥太郎。「人間の性に就て」西村鐵次郎。「所感」梅至榮太郎。當日出席者廿六名にして會長細野辰四郎下來會せられ、各員熱血なる辯舌ありて、少數の會合ながら大に意義ありたり。△十五日釋尊涅槃會修行。「圖繪に就て説明」三好信道師△十五日林玉嶺氏宅「人道より佛道へ」香田通泰師。不思議なる者。原田本山部長△十八日本山有教部主堂例會。「人情美」有田安道師。「宗教の人格論」原田本山部長△二十二日午後七時久遠寺例會「人道と佛道」三好信道師。「迷へる者悟れる

者」金光孝順師△二十五日本山に於て開山會法要殿終、原田日男師の説教あり、參詣人は互に開山に對する懇恩を語り合ひ、盛會なりき。

#### 日蓮上人御降誕祭兒童大會

日時 二月十一日午前十一時  
場所 寺町丸太町上の山口佛教會館  
當日午前十一時京都日蓮門下兒童七百餘名各會旗を樹立し、寺町二條橋本山妙滿寺本堂前に集會、其より各自兒童は宗祖御杖草入の小旗を手にし、旗行列をなして、寺町通を北に山口佛教會館に順次到着し、静順に會場に就けり。

#### 「開會の辭」村雲少女會主幹尾尼薩台諒師。

君ヶ代、禮拜、献花、  
奉調拜讀 隆山小供會責任林順榮師  
唱歌太平洋、祝詞、唱歌聖祖釋尊、  
御講話 熊見杖童先生  
日蓮上人御降誕寫真を映寫併説明

「劍」は道場の中ばかりに有るものでないの一言、げに金鐵の響なり。信佛も其の道に、行住坐臥動作本因妙位に安住するのでなくては駄目、油斷は大難乃公はもう大丈夫信仰を獲せりと、一廉信者ぶる具慢如惱の羽翼下に第六天の寛土の眷屬は遠慮なく喰ひ入る、おき元御用儀肝要なり。

床に申し風が、此小話の主人公たる御子神典謀こそは、後牛故ありて小野次其右衛門忠と改稱、徳川幕府に仕へて將軍武官の副指南番となり小野一刀齋を開きし名人なり。而も懇篤なる法華信者として常業院に、經上人の門下に列なり二男(慶日)とを、上人に就して徒弟となし、隻手淺草田前に改印寺を建立せし大體那なり、今の牛込常業寺は不肖村が時代の趨勢に、少、本少習長の指導の下にその古跡を再興、寺觀に復活せしものなり。

#### 社會教訓談話 或 演習 豊

閉會之辭 願本健兒會 有田安道師  
萬歳三唱 同 豊田通泰師發聲  
當日は紀元節なるを以て少國民等樂しき意義ある宗祖立正大師御降誕祭を大に奉祝せり。  
△毎日曜日午前九時本山に於て健兒會開健兒童の集會四五十名也、講師土持、有田、豊田、各師、中島、山田、龜井等の各氏熱心に兒童訓育に就き教導せられたり。

#### 大阪立正結社降誕會

立正結社大阪支部は二月十五日の、曜日を以て立正大師の降誕會を舉行した、當日は珍らしき好天氣にて日は朗らかに風は軟かく、降誕會には最もふさわしき日であつた。  
大聖人の御降誕を心から悦ぶ善男善女は家族手を引き合ふて第一會場たる蓮成寺へ午前九時頃より三々五々参集し始め、十一時頃には本堂は立錫の餘地なきまでに人を以て埋つた君が代の奏樂と、もに式は開始せられ、莊嚴程に修法を終り、中食後一同支那旗を先登に隊伍整々として一絲亂れず、中寺町經由、第二會場たる堂園寺に向つた、節にして然も悦に滿ちた囀唱の聲は春風を縫ふて虚空に飄流

し、鼓をさるに天鼓自ら鳴るの光景を呈した  
堂開寺に著するや、一同満腔の赤誠をこめて  
御寶前に大聖人降誕の恩徳を謝したつた、直  
ちに餘興の福引に移つた、鼓は次から次へと  
讀み上げられ、奇想百出歌舞囃米湧くが如く  
十二分に御祭り気分を發揮し、高談を三唱し  
て、大満悦の裡に午後五時頃無事散開した。

### 大阪教報

一月十二日堂開寺初講、日蓮主  
義信仰要旨、京藤山主、「自己を凝視して」川崎  
教務部長。講演後新年宴會、頗る盛會を極む  
△二十二日立正結社談話會、知恩報恩、石井得  
雄氏、法難に對する日蓮聖人の態度、京藤布教  
師△二月十日蓮成寺にて讚仰會發會、「日蓮聖  
人の宗旨」と井田寛舟氏。開目抄所感、井口富  
雄氏△十二日堂開寺にて、日蓮聖人の高風、井  
口富雄氏。「佛敎徒の自覺」上田智章師。多数  
の聽講者に多大の感動を興へられたり。

### 金澤布教

△一月十二日夜、一誠會講演  
「正法行人の決心」本郷常次郎氏、△十三日夜  
立正會講演「佛法と世間的儀禮」本郷氏△十七  
日夜、於坂井氏宅、「國家談話」本郷氏、△二  
十日午後三時於日蓮宗寺院新年會、「法華經第  
一の肝心」本郷氏、△廿二日午後三時於本長  
寺「女人の成佛」宿田純榮師、「主師親の徳」

本郷常次郎氏、△廿六日午後八時、於本長寺、  
天晴會講演「法師品概要」宿田師、「大藏經講  
義」本郷氏△廿七日午後三時於尾山神社、舊  
館で講演「團體精神の宣揚」本郷常次郎氏、福  
榮幹事千田少佐以下八十餘名。△廿八日午後  
三時於本行寺「法華經講義」本郷常次郎氏、  
因に石橋や章師は病氣中にて休講せられたつ  
あり。

### 和氣の立正會

岡山縣和氣町では今回有  
志の發起により、信念強固なる士を以て神聖  
なる一團を作り、益々信仰に向つて猛進する  
を經とし、一面社會道徳涵養を緯とし、大に  
日蓮主義發揚に努むる計畫を樹てしが、立所  
に多数の會員申込あり。即ち二十四日發會式  
を兼ねて第一回開力振興講演會を開き、細野  
陸軍少將を招聘し、同日午後七時より和氣俱  
樂部に於て大講演會を開きたり。聽衆四百餘  
名、「開會の辭」佛敎青年會長方波野夫氏。  
「人と教」立正會副會長橋本常昭師。「力は道に  
あり」統一開支部長熊井本光師。時局と日蓮  
主義」陸軍少將細野長雄閣下。

### 久留米の立正結社講習會

大正十四  
年一月三十一日より同二月二日まで三日間久  
留米市寺町八三立正結社九州支部で立正結社

講習會を開催した、題目及講師左の如し  
「覺醒せよ」法學士藤澤士中原龍巳先生  
「罪」 辯士西山 初先生  
「日蓮主義の本尊觀」 中原 通應師  
「信仰の要旨」 田海 義通師  
**千葉縣報** △一月六日午後演庭元福寺婦  
人講、日蓮聖人御傳「野口海印山主。「色讀の  
信仰」中嶋元道師△八日夜常覺寺に於て十二  
日講、過去を辿りて、中嶋元道師△十二日夜常  
覺寺に於て婦人講、夫睦相和し「中嶋」道師△  
二十四日午後常覺寺に於て親睦會。「青年團  
の使命」君塚太一君。「吾人の希望」石田山  
三郎先生。「我國の前途」中嶋元道師。  
**高貴布教報** △十一月十一日山武郡雨濱川  
開會例會。「法華經講義」高貴布教師△二十七  
日同上。「法華經講義」高貴布教師△三十日長  
生郎東郷村七波龍龍寺開會。「信心の三徳」  
高貴布教師△十二月一日午後一時高田長榮寺  
に開講。「開會の辭」川崎英昭師。「感謝の生  
活」小嶋布教師。「精神修養に就て」高貴布教  
師△十一日栗生野開立寺にて開く。「開會の  
辭」吉見俊教。「信心の三徳」高貴布教師。「感  
激の精神」小嶋布教師△十三日桂安立寺講演  
「開會の辭」小宮宣勝。「信仰と感激」小嶋布教

萩原正△十日日本正寺に於て開講會並に本正  
婦人會初會。「消化せる大和民族」金光布教師  
餘興として茂山社中の狂言「土筆」「末廣野」  
「呼聲」「宗論」歌舞。三曲合奏「玉の臺」伊原  
檢校三好毒子谷口君子山川洋子「四季の詠」  
伊原檢校三好毒子。其他會員の各自餘興福引  
等あり、細野閣下始め男女二百餘名參列盛會  
なり△十五日小川通林玉嶺宅講演「信教と佛  
教」三好信道「精神修養の根本義」金光布教  
師。「四法常住」萩原正△十八日午後七時始

### 立正結社東海支部大法要

- △三月二十三日 愛知縣渥美郡野田村法華寺に於て
- △三月二十四日 三重縣四日市市沖ノ嶋安樂寺に於て
- △三月二十七日 靜岡縣濱名郡吉津村吉美妙立寺に於て

### 一、關東大震災被災死者靈法要

本部特派僧正 井村日威師  
監督布教師 本村日保師

### 日蓮主義大講演會

△日時 三月十日午後六時  
△場所 岡山縣津山町 顯本正義弘通所  
講師 監督布教師 文學士 中川日史師

講寺講堂に於て「信仰」「三好信道」人に教な  
ければ」金光布教師。「唱題成佛の意義」萩原  
正△二月八日日本正寺二樂會。「七福神の教  
訓」原田本由部長。「革命思想と宗教」陸軍少  
將細野長雄閣下。「日蓮上人統一」宇都宮博  
孝君講演盛會なり△十日午後一時本正寺婦人  
會。「正しき信仰」中島孝治氏。「宗教の力」金  
光布教師。

師。「信心の三徳」高貴布教師。

千葉縣一宮町布教。一宮町は懸下福地の一  
なり。此の地開教の計畫は敢々試みられしも  
未だ實行の運びに至らざりしに、四布教區は  
同地を以て布教中心地として選定し着々開教  
の歩を進めんとして、先づ十二月五日高貴小  
嶋兩布教師及秋葉、木村、矢部、堀江の諸師  
等に依りて第一回踏踏宣傳を開始したり、猶  
宣傳後町役場に町長を訪問して近々開催の豫  
定なる公開講演に就て相當便宜を要求して引  
上げたり。△十二月十日同上第二回宣傳、秋  
葉木村堀江の二師に依つて實行せられたり、  
△十四日山武郡雨濱川開會例會。「法華經講  
義」高貴布教師。

### 羽前教信

一月中梨郷本覺寺に於て毎土  
曜日夜信行會「人道と信仰」日暮玄靜△一月  
二日朝令寶藏寺にて現住職の師範規木日種上  
人の第七回忌を慶修後童話會。村田義本、清  
野源藏出演した、尙五十嵐長藏は監附一箱寄  
附ありて來會者五十餘名に頒つた。

### 京洛布教通信

△一月八日日本正寺二樂會  
例會「自己を知れ」「三好信道」「正信とは何ぞ  
や」金光布教師。「報恩の道徳と發啓の道徳」

# 朝鮮釜山顯本會堂建立淨財勸募之辭

五〇

人心思想の如何によりて強大なる國家の基礎も一朝にして倒壊し廣大なる世界の平和も之が爲に擾亂せられ光輝ある文明の建設得て望むべからず。斯の如き事實歴々として吾人の面前に展開し來たる。大聖釋尊は曰く「毒蛇猛虎よりも恐るべきは惡智識なり」聖者日蓮は曰く「國土亂れん時は鬼神亂る鬼神亂るが故に萬民亂る」と然るに今や舉世滔滔として懷疑の弊に陥り精神の力を失ひ物慾の追求に疲れて晴嵐の野に彷徨し一點の清光を認め得ざるもの多きを致せり。今にして風教を作振する事無くば浮華輕佻の風一世に瀰漫し民心益々動搖國力漸く空虚を來し復た如何とすべからず。殊に朝鮮は我日本の併合以來爰に拾有餘年、若々教育と産業の開發に顯著なる成果を見るも、夫だ宗教の方面に於ては其の緒を見ず、之が爲に下層鮮民の多くは赤化の思想に煽動されて遂に不逞の漢を見るに至る苟くも心を邦家の前途に繋ぐる者豈憚心戮力以て之が教授に努めざるべからず。其の教授の術は日蓮主義の思想を以てせずば斷じて不可能也。不肖橫山正通は大正四年拾月海外宣傳を志し單身渡鮮を決行す、想へば六百年の昔國士日持上人は聖者日蓮の遺教を奉じて海外宣傳の雄圖を懷き單身北海の波を蹴つて露領北滿の天地に世界統一の大義を獅子吼せられたる回想する生等の血は自ら湧出で、聖職の陣頭に參加するの光榮を喜び翌大正五年二月十一日日蓮讚仰天晴地明會を設立し大正十一年五月顯本布教所を設けして日蓮主義の宣傳に盡力を致す、其間あらゆる困苦多々なるも漸くその教化の實現れ爰に今夏釜山中樞の位置に會堂建築敷地として九拾壹坪の土地を購入し更に會堂建立の計畫も已に成り來春二月工事に着手せんとす、希くば爾喜よりの士女、の要樂を贊助し淨財を喜捨し以て發願を成就せしめられん事を。

大正十二年十二月

發願人

橫山 惠正 永見 京造 江川 傳太郎 熊本 新  
別府 禮吉 矢頭 伊吉 吉川 義治 上南 收五郎

寄附金募約要項

一、敷地九拾壹坪 金九千七百圓

一、會堂五拾六坪五合

金八千九百六拾圓(棟瓦建)

一、工事着手 金千七百七拾圓(棟瓦建)

一、工事完成

大正十四年二月  
大正十四年七月

一、寄附金は朝鮮釜山顯本會堂本布教所へ申込及納入願上候。

## 魔法インキ瓶出現

特許 改良ポケツトインキ



この蓋の中央から下向に突出て居るのがセルロイド製の二重式漏斗です……インキを詰替た際は蓋を固く締めて下さい……蓋の取り回しき場合は少し細長い木切れ又は竹切れで蓋の周圍をかかくたたいて下さい……

特長

コロンアモサカサニシテモインキガゴボレズ詰替は自由です

今や大中小女學校各會社工場寄宿舎等にて白熱的好評を乞ふ今回實物宣傳の爲愛讀者に限り校名又は會社官衙團體等の捺印申込者に限り原價提供致します(カタログ無代送呈)

總發賣元

舟橋商會

名古屋市白土町四五

電話名古屋二四二三番  
電話東局四四二七番

## 社寺建築及臺灣檜材の安價提供

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

東京市麴町區有樂町三丁目三番地

社寺工務所

(電話銀座三〇八八番)

神奈川縣鶴見町

社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原

社寺工務所福岡支所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社寺工務所大阪支所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の六大大特徴  
一、耐久防腐  
二、蟻害絶無  
三、香氣清楚  
四、木質堅緻  
五、木理整然  
六、木色高稚



# 統

# 一

## 目次

國家の興隆と佛法の興隆……………	井村日生
日蓮主義より見たる無量義經……………	本多日成
法華經要文講義……………	本多日成
罷睡錄……………	山根日東
記事報導……………	

第三十三年四月號

統一價		統一價	
一冊	金貳拾錢	一冊	金貳拾錢
半年	金壹圓貳拾錢	半年	金壹圓貳拾錢
一年	金貳圓貳拾錢	一年	金貳圓貳拾錢
送料共	金貳錢	送料共	金貳錢
送料共	金貳錢	送料共	金貳錢

本多日生現下施用著書一覽

- 法華經自我講義 拾部 特價 金貳拾錢
- 法華經要文 (改訂再版發行) 拾部 特價 金壹圓貳拾錢
- 教育勸語と思想問題 拾部 特價 金貳拾錢
- うゐの奥山今日こえて 拾部 特價 金壹圓貳拾錢
- 國と人と 拾部 特價 金壹圓貳拾錢
- 佐藤海軍中將著 拾部 特價 金壹圓貳拾錢

此の際に於る吾人の覺悟 拾部 特價 金壹圓貳拾錢

名古屋市東區田代町城山 編輯局

電話 東五〇八七番  
名古屋 一〇八一九番

顯本法華宗 義門講習會開催廣告

一 講題 本尊論 管長大僧正本多日生師

一 講師 法華信仰ノ基調 宗務總監僧正井村日成師

一 會期 大正十四年五月二日ヨリ全六日マデ五日間  
毎夜間午後七時ヨリ全十時マデ

一 會場 大阪市東區西高津中寺町地藏坂北蓮成寺

一 會員 聽講券金壹圓會期中有効

一 申込 大正十四年四月二十五日限り

大阪支所 大正十四年四月二十五日限り

立正結社大阪支部

大正十四年 二月十七日印刷納本 (第三百六十號)  
大正十四年 三月一日發行

編輯所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
發行所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
印刷所 東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地  
編輯所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地  
發行所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地  
印刷所 名古屋市中區千種町字五反田五二番地